植民地時代（中期）ポトシ銀山とその周辺部社会における市場経済の浸透と先住民

―ぶどう酒、コカ、水銀―

真　鍋　周　三

I　はじめに

1545 年に発見されたポトシ銀山はアルトペルー（Alto Perú）の中心であるチャルカス（Charcas. 現ボリビア多民族国を中心とする地域）の南部高地に位置する。当初は荒涼とした不毛の地であった。ポトシ銀山はセロ・リコ〔Cerro Rico（富の山）〕とよばれるピラミッド形をした山である。その北側にポトシ市がある。ポトシ市の海抜高度は 4070m、セロ・リコの海抜高度はおよそ 4790m である。低緯度（南緯約 19 度）にあるとはいえ高地に位置している関係からポトシの気候は寒冷である。

スペイン植民地支配体制下においてカシケ（*cacique*. 先住民共同体首長）は貢納（tributo）を徴収し、ポトシ銀鉱業のミタ（*mita*. 強制労働 [1]）の労働者を自己の共同体から選出・徴集した。だがカシケは単なる受け身の仲介者だったのではない。一部のカシケは商業活動を行ったり、農牧畜用地やアシエンダ（hacienda. 農園）を入手し、自己の経済的状況を向上させようとするアクティブな存在となった。

1570 年代後半から 17 世紀初期にかけてポトシ銀鉱業は繁栄し、ポトシには巨大市場が出現した。しかし 17 世紀半ば以降になると銀鉱業は衰退を遂げていく。その主因の一つに鉱山労働力の減少があげられる。ポトシでは過酷な労働に直面したミタヨ（*mitayo*. ミタに従う労働者）の死亡やミタ労働の回避現象が頻発していた。他方、ポトシ周辺部ではアシエンダが増加しており、先住民労働力を吸収した。このことはカシケに大きな影響を及ぼした。カシケは配下の共同体員成年男子を定期的にポトシに派遣する責務を負っており、共同体から逃亡・失踪した先住民不在者の貢納の負担を埋め合わさなければならなかった。債務不履行が生じた場合、当該共同体を管轄する植民地支配者のコレヒドール（corregidor. 地方行政官）によって債務の履行を命じられた。社会的上昇を遂げるカシケが出現する一方で、他方では没落するカシケも出てきた。

17 世紀アルティプラノ〔altiplano /altiplanicie. [南北に延びる 2 つのアンデス山脈であ

[1] ミタの対象者は貢納の場合と同様、成年男子であった。一度の徴集規模は各先住民共同体の成年男子全人口の 1/7 以内に止められた。

る東コルディエラ山脈（Cordillera oriental de los Andes）と西コルディエラ山脈（Cordillera occidental de los Andes）との間に挟まれた海抜高度 3800m 前後の高原地帯。その特徴は高地の湖と広い高原で、チュクィート地方（la Provincia de Chucuito. 地図１）に代表されるように先住民の密集地帯であった］〕のカシケのうち、社会的上昇を遂げていた人の事例を少しみてみよう。

例えば、ペドロ・チパナ（Pedro Chipana）はチャルカスのシカシカ地方カラマルカ村（el pueblo de Calamarca de la Provincia de Sicasica〕のカシケであった。同村はラパス市の南方約 50km の地点に位置し、オルロやポトシに至る幹線道である「王の道（Camino Real）」沿いにあった（地図２）。ポトシ銀山のミタに配下の共同体員を派遣する仕事、すなわちミタの選出人・差配〔capitán general de la mita（ポトシのミタ労働者の送り手側で人選を行う役職）〕を務めていた。チパナは太平洋沿岸部のモケグア（Moquegua）地方やアレキパ（Arequipa）地方の渓谷部（地図３）に出向き、ぶどう酒を仕入れ、シエラ（sierra. 山岳部）の諸都市で販売した。アリカでは商業や輸送業に従事した。モケグア地方に代理人を派遣していた。ポトシでは代理人を通じていろいろな生活必需品やぶどう酒を販売した。1688 年頃、ポトシの銀鉱業にも手を染めていたことがあるが、彼の蓄財の基礎は商業活動にあった［Choque Canqui 1978:28-31; Sánchez Albornoz 1973:1］。

次にガブリエル・フェルナンデス・グアラチ（Gabriel Fernández Guarachi）の場合をみてみる。彼はパカヘス地方ヘスス・デ・マチャカ村（el pueblo de Jesús de Machaca de la Provincia de Pacajes）のカシケであった。彼の経済的基盤も商業にあった。ラパス、オルロ、ポトシの各都市で商業を営んでいた。モケグア谷ではぶどう酒を手に入れ、それをシエラに運んで販売した。ラレカハ地方など近隣の渓谷部において自身のチャクラ（chacra. 小農園）を所有した。トウモロコシ・小麦、そしてラパス・ユンガス（Yungas de La Paz）（地図４、地図５）[2] から運んできたコカの葉（coca. 以下、「コカ」と略称）をポトシ市場で売りさばき巨万の富を築いた。グアラチもまた貢納の徴収、ポトシのミタ徴集の責務を果たした。彼が所有していた財産（家畜や土地、債権＝貸付け額）の実態は、リベラ・クシカンキによって詳しく紹介されている［Rivera Cusicanqui 1978:9-12,14-16］。

こうしたカシケの経済活動について、他の事例を一覧表にまとめた（第１表）。17 世紀において一部のカシケが実に企業家精神に富む人々であったことがわかる。

本稿では、カシケが扱った商品であるぶどう酒とコカを大きく取り上げるが、ポトシ市場への（地元の）商品供給に注目した場合、この二つは 16 世紀末から 17 世紀にかけて最

[2] ティティカカ湖周辺のアルティプラノとラパス・ユンガス一帯（地図１、地図２、地図４、地図５）の地名〔地方―シカシカ、オマスーヨス、ラレカハ、パカヘス、ラパス郊外の３教区、チュルマニ、カウポリカン（アポロバンバ）とそれぞれの地方に所属する村落〕の詳細は、［Klein 1980:206］に詳しく示されている。［Saignes 1987:148-153］と併せて見ていくとはっきりする。図表はすべて本文末に示す。

重要な商品・換金作物であったこと、アルティプラノの先住民がとくに好んで取引した商品だったことである。ティティカカ湖周辺の先住民の商人･輸送業者（trajinantes）はもっぱらポトシ市場にたくさんの物資を届けたのである［Glave 2000:163］。

本稿は、植民地時代前半期から17世紀中期にかけてポトシとその周辺部社会において市場経済が浸透するいっぽうで、17世紀後半になるとポトシ銀鉱業が衰退していくなか、標記のテーマについて考察を深める。17世紀という時代が進行していく中で、アンデス社会の変容や先住民の状況をみてみたい。

本稿の考察の手順であるが、次章ではポトシ銀鉱業の基本的事項を扱う。第III章では市場経済の浸透と先住民について検討する。第IV章では、17世紀ポトシ銀鉱業におけるミタ労働者の減少とその影響を考察し、最終章で結論を述べる。

II　ポトシ銀鉱業をめぐる基本的事項

本章では、まず、1570年代に第5代ペルー副王トレドによって開始された、スペイン王権によるポトシ銀鉱業への介入、そして出現した官民混合事業への流れをみていく。またポトシ銀鉱業を実質的に支えた生活必需物資の調達について検討する。そしてポトシ周辺部における各拠点地域の出現と先住民カシケについてみていく。

1．副王トレドの大改革（ポトシ銀鉱業への王権の介入）から官民混合事業へ

スペイン人征服者ゴンサーロ・ピサロがチャルカスを征服して以降、インカ時代から銀がとれていたポルコ（Porco. ポトシから南西へ約36kmの場所に位置する）の町には1538年からスペイン人が住みついた。1539年にチュキサカ〔Chuquisaca. 別名ラプラタ（La Plata）。ポトシの北東約80kmの地点。現スークレ〕の町が設立された。ポトシ銀山の発見後、セロ・リコの北側にシルバーラッシュによって殺到した人々の雑然たる定住地が出現した。ポトシ銀山の労働者としては、まずインカ時代から採掘されてきたポルコ銀山の専属労働者であるヤナコナ（yanaconas）が到来した。チュキサカ市は急激に成長を遂げチャルカスの行政上の中心都市となり、1559年には当地にアウディエンシア（Audiencia de Charcas.「アウディエンシア」とは「王立聴訴院」。スペイン植民地の司法行政機関）の本拠が置かれた。この司法機関の管轄下でポトシの銀鉱業は展開されていく[3]。銀の精錬

[3] アルトペルーにおける教会権力（教権）についてみておくと、1552年にラプラタ（チャルカス）司教区〔Diócesis u Obispado de La Plata (Charcas)〕〔1609年、大司教区（Arzobispado de La Plata o Charcas）に昇格〕が創設され、ポトシはこれに所属した。1571年にはトゥクマン（Tucumán）司教区、1605年にはラパス司教区とサンタクルス・デ・ラ・シエラ（Santa Cruz de la Sierra）司教区がそれぞれラ・プラタ司教区から分離して独立・誕生する。

は1570年代半ば以降になると、インカ時代から続いてきたワイラス法精錬〔la refinación de *huayras*. 風炉（*huayra, guayra, waira*）を使用する方法[4]〕から水銀アマルガム法精錬（amalgamación de mercurio. 銀鉱石の粉末に水銀を混ぜて銀を抽出する、ヨーロッパの伝統的な精錬法）に変わっていく。ポトシの銀鉱業は王権の介入を契機に官民混合事業となる［Bakewell 1984:9-10,14,16-17, 30,36］。

ペルーでは1564年1月以降ワンカベリカ水銀鉱山（las minas de mercurio de Huancavelica）が開発されることになり水銀の生産が行われていた。第5代ペルー副王フランシスコ・デ・トレド（Francisco de Toledo. 在位1569-81）はポトシの銀精錬に水銀アマルガム法を導入するため[5]フェルナンデス・デ・ベラスコ（Pedro Fernández de Velasco）をポトシに派遣した。ポトシ銀山の鉱山業者たちは水銀アマルガム法精錬への転換に躊躇しており、まず精錬業者にこの新技術を伝達し彼らを教育する必要性があり、彼にその役目を担わせた。また水銀アマルガム法精錬の導入にあたり、多くの問題が山積していることを副王は見逃さなかった。すなわち、その前段階に行っておかなければならない4つの必要条項があることを理解した。そしてこれらの条項を満たすために諸政策に着手する。すなわち、①銀鉱石を粉砕・精錬するうえで必要な大量の水の確保と、精錬所への水の供給体制の構築である。そのために副王トレドはまず、ポトシ市東部に位置する山地に人工湖を設けることにした。また、②水力装置にもとづく複合施設・新型精錬所（ingenio de agua）の設立が必要であった。次に、③大規模な先住民労働力を確保し、それを鉱山ならびに精錬所に投入するシステムを考案した。そして④水銀の安定的確保とポトシへの水銀の安定的供給である。これらのことがらを準備・達成するために、1572年12月に副王トレドはポトシを訪問した［Robins 2017:56］。

トレドの命令・指揮の下で①人工湖は完成し、リベラ川〔この川も整備されて人工河川となった（la Ribera artificial）[6]〕を経て精錬所への水の安定的供給が可能となった。②複

---

[4] 風炉のサイズは高さが約2m、直径が約75cm。ポトシの風炉はかつては6500くらいあったといわれている。1549年にポトシを訪れたシエサ・デ・レオンは、夜になるとその装飾的な光（ルミナリエ）が山の斜面を覆ったと述べている［Bakewell 1984:16-17; アコスタ 1966:345-346］。

[5] ペルーにおける水銀の発見は1564年よりも以前に遡る。2人の探鉱者―ポルトガル人のエンリケ・ガルセス（Enrique Garcés）とペドロ・コントレラス（Pedro Contreras）はリマの市場でリンピ（llimpi）を売る女性たちを目撃した。女性たちに問いただしたところ、それはワマンガ（Huamanga. 現ワンカベリカ県とアヤクチョ県）から運ばれてきたものであることが判明。その後、2人はワマンガに出向き、辰砂（cinabrio）を掘り出し、それから水銀を取り出すことに成功した。第3代ペルー副王カニェーテ侯（Andrés Hurtado de Mendoza, Marqués de Cañete. 在位1556-1560）がこれに注目する。副王は、水銀アマルガム法を学ばせるためにガルセスをヌエバ・エスパーニャ（現メキシコ）の銀鉱山に派遣した。メキシコでは鉱山主バルトロメ・デ・メディーナ（minero Bartolomé de Medina）によって水銀アマルガム法による銀の精錬がすでに行われていた。1559年、ペルーに戻ったガルセスはそのシステムの実用化に取り組むことになった。翌1560年、ガルセスはワマンガのパルカ（Palca）から取り出した水銀によって銀の精錬に成功する。ペルーにおける水銀アマルガム法による最初の銀精錬の達成であった。この成果が後になって、副王トレドに引き継がれたのである［Robins 2017:55-56; Escobari de Querejazu 1985:62］。

[6] リベラ川はポトシ市内を東から西に向かって流れる。

合施設・新型精錬所もできた。そして③鉱山・精錬所に投入するための大規模な労働力を徴集するためにミタ制を王権サイドから再編成した。ミタはインカ時代からアンデスの先住民社会に厳然と存在し続けてきた労働力の徴集システムであった。ミタの編成に先立ちトレドは、「レドゥクシオン（reducción. 先住民の集住政策）」と呼ばれる方式によって、先住民を一所に集めた。これを基にミタの再編を行ったのである。④については、ワンカベリカ水銀鉱山の開発を推進し、ポトシまでの水銀供給体制を構築した［真鍋 1995:15-17］。

これらの政策によって、停滞していたポトシの銀生産は一挙に高まり未曾有の生産高を遂げることになった[7]。5分の1税（quinto real）[8]の徴収額もめざましい上昇を遂げていく。王権にとって好都合だったのは、水銀によるこの精錬法が5分の1税の脱税防止に役立ったことだ。水銀の消費量によって銀の生産量が割り出されるようになったからである。

王権はワンカベリカ水銀鉱山の運営維持にことのほか力を入れた。リマ財務府（Caja Real de Lima）[9]はワンカベリカ水銀鉱山に対して毎年国庫から貸付金を提供した。17世紀になるとその貸付金はペルー副王領内から徴収された税収総額の9.4％にも達した［Andrien 1985:72］。副王トレドがポトシに導入した官民混合事業の結果、ポトシ銀山は大量の銀を生み出し、富の象徴として世界的に有名になった［真鍋 2011; 真鍋 2012］。

1570年代後半から17世紀前半にかけてポトシの銀生産は頂点に達した［Bakewell 1984:28-29］。ポトシ市は人口が12万人（1572年）から16万人（1611年）におよぶ西半球で最大級の都市となった。ポトシ市にはさまざまな商品がヨーロッパや東洋をはじめ海外から、また植民地域内から大量に集まり、市場経済が浸透していった。そうした物流に着目したスペインは、（食糧などの非耐久消費財を除き）商品取引に対してアルカバラ（alcabala. 販売税）を課すことにした。ここでアルカバラ税率の変遷を確認しておきたい。ペルー副王領では1591年の勅令（real cédula）によって、アルカバラとして当該商品価格の2％の税が課せられるようになった。17世紀に入り、ペルー副王チンチョン伯（Luiz Gerónimo Fernández de Cabrera, Bobadilla Cerda y Mendoza, Conde de Chinchón. 在位1629-39）の統治期にこのアルカバラは「4％」に値上げされた［Escobari de Querejazu 1985:30］。〔18世紀のカルロス3世の改革期（1759-1787年）の1776年にアルカバラは「6％」に値上げされ、しかも食糧などの非耐久消費財にも課税された結果、先住民反乱の一因と

7 ポトシの銀生産は16世紀の終わりにピークを迎え1650年までに傑出した段階に達した。1570年代後半から1650年にかけてをピークに、少なくとも2世紀にわたってポトシは世界の銀生産高の半分以上を生産し、スペイン経済を支えたとされる［Escobari de Querejazu 2001:203］。

8 1556年1月から1738年12月までにスペイン王権が受け取った5分の1税はポトシ財務府（Caja Real de Potosí）の税徴収台帳（los libros）に記載されている。現金（moneda. 貨幣）と現物（los mineros. 銀塊）の2種類で受け取った。その合計額の内訳について、研究者は貨幣：151,722,647ペソ、鉱物：820,513,893ペソと考察している［Escobari de Querejazu 2001:203］。

9 それはペルー副王領内に20近くの財務府支部を配置した。地図6参照。

なった［真鍋 1995:124,162］。〕

２．生活必需品の供給と「垂直統御」

シルバーラッシュによって各地から多くの人やモノがポトシに流入した。北方のクスコ地域から、また西方のアレキパ地域からポトシに向けて隊商が動き始める。銀５分の１税を本国に送るうえでも、植民地政府は道路網の開発や架橋工事を行うなどインフラの整備に力を入れた。1555 年にはリマとポトシを結ぶ道路が開通し、1570 年代までには、リマからクスコを通りアルティプラノを抜けてポトシへ至る幹線道が完成し、それは「王の道」として知られるところとなった。拠点都市もいくつか生まれる。例えば、中継都市としてラパス（La Paz）市が建設されたのは、早くも 1548 年のことであった。1571 年にはコチャバンバ（Cochabamba. 旧名は「オロペサ（Oropeza）」）市、1606 年にはオルロ（Oruro）市が設立された。

一大消費センターになったポトシに流入した物資は食糧品を主とする人々の生活を支える必需品や舶来の奢侈品などであった。副王トレドの時代になって植民地支配体制が確立される。トレドの諸政策を基盤としてポトシへの物資供給体制はいちだんと整備され拡張されていく。

1603 年にポトシ周辺部地域からポトシに流れた生活必需物資を年単位でおおまかに見ておく。トップの座を占めたのは、小麦粉９万ファネガ（fanega. 穀類の容量単位。１ファネガは 55.5 ℓ）であった。続いて酒類、すなわちトウモロコシからつくられるチチャ酒６万ボティハ（botijas,「ボティハ」とは「素焼きの壺」で酒類の分量を示す尺度になった。１ボティハは８ℓの容量）とぶどう酒５万ボティハである。ぶどう酒は南米大陸西部海岸地帯のアレキパ地方やモケグア地方の渓谷部（ブドウの産地）から供給された。次がコカの葉（hoja de coca. ユンガ産の灌木コカの木の葉。先住民が先スペイン期から収穫してきた）６万かごである。コカはとくにクスコ地域東部のパウカルタンボ（Paucartambo）とラパス・ユンガス（Yungas de La Paz）などが主産地であった［Arzáns de Orsúa y Vela 1965:6-8; Jiménez de Espada 1885: 124,126-132］。

次に 1603 年のポトシ市場における生活必需品の年間売上額を大きい方から順にみておく。第１位は小麦粉（164 万ペソ）であった。小麦粉は主にパンの原料であった。これにチチャ酒（102 万ペソ）、ぶどう酒（50 万ペソ）、コカ（36 万ペソ）、トウモロコシ（28 万ペソ）、ジャガイモ（12 万ペソ）・チューニョ（chuño. 凍結乾燥させたジャガイモ。保存食）（12 万ペソ）・オカ（oca. カタバミの一種で根茎が食用。12 万ペソ）、果物（11 万ペソ）が続く（ジャガイモ、チューニョ、オカの売上額は同額であった）。ポトシ市場では小麦粉と酒類（チチャ酒とぶどう酒）という最もポピュラーな食品の売り上げが最高であっ

た[10]。ぶどう酒とコカは単価も高く―ポトシ市場においてぶどう酒単価は10ペソ、コカの単価は6ペソ―、商品として優位にあった。家畜はアルティプラノやリオ・デ・ラ・プラタ（Río de la Plata）が主要産地であり、年間売上額も大きかった[11]［真鍋 2011:72-73; 真鍋 2020:89; Escobari de Querejazu 1985:42］。

アンデスの人々の暮らしを支えた食糧品等の調達を考える際に重要な視点は、生態学的システムを利用する方法、すなわち「垂直統御[12]」とよばれる考えである[13]。アンデスにおいて人々は先スペイン期から、寒冷にして生産性の低い高地に集中して住み続けてきた［Murra 1996; Murra 2002:94-100］。人々は高地の農牧畜業だけに頼ることなく、太平洋沿岸からアマゾン川支流域にまで及ぶエリアの農業資源全般に目を向けていた。生態学的統合の考えである。海岸部（costa. 以下、「コスタ」と略称）、シエラ、セハ・デ・セルバ（Ceja de selva o montaña. アンデス東部地域。「セルバ」と略称）を横断する多様な地帯から物資を調達するという方式に基づいて人々は昔から暮らしてきた。すなわち物資の調達は3つの広大な地帯を横断する空間において展開されてきたのである［Dollfus 1996:16,18-19,22, 25; ロストウォロフスキ 2003:v］。アルティプラに住む先住民は近郊の山麓や渓谷はもとより、じつに広大かつ多様な地域に触手を伸ばした。スペイン征服後においても住民のこの生存・生活方式が変わることはなかった。高地の先住民共同体は太平洋沿岸部の渓谷部やユンガスの生産物にアクセスしたのだった。先スペイン期からのコロノ（colonos. 移民）やミティマエス（mitimaes. 強制的移住民）を派遣するという考えは植民地時代においても持続する。ティティカカ湖南西岸のルパカ人〔los lupacas. チュクィート地方のアイマラ系先住民（indígenas de aymara-hablantes del lago de Titicaca）。「ルパカ」とはチュクィート地方の先住民民族名・地名[14]〕の行動様式が想起される[15]。伝染

---

[10] 海抜高度に基づいてアンデスの栽培領域や限界点をみると、例えばジャガイモは3500から4300m、オカは3500から4200mの範囲で栽培され、小麦は3600mくらいが上限であった［Morlon 1996: 110］。

[11] 17世紀以降になると、ペソの単位は「peso ensayado」とみなしてよいだろう。真鍋［2020］参照。

[12] ジョン・ムーラの概念によると、正確には、「アンデス社会の経済における生態学的階床の最大限垂直統御（el control vertical de un máximo de pisos ecológicos en la economía de las sociedades andinas）」という。「垂直列島（archipiélagos verticales）」という概念も時々用いられる。

[13] 1535年、ディエゴ・デ・アルマグロの一行はコリャスーヨ（Collasuyo. インカ時代のアルトペルーの呼び名）に遠征した。その結果、スペイン人はコヤオ（Collao）地方つまりアルティプラノの情報を得た。征服直後からスペイン人はアンデスの生態学的な特徴を観察したのである。それは20世紀になってドイツ人地理学者カール・トロールによって理解され、東欧生まれの米国人人類学者ジョン・ムーラによって分析・考察された。寒冷な高地で人々は暮らしながらも、寒冷さを利用して食物保存の技術を身につけるとともに、熱い渓谷部と「相互交換」を行ってきた。物資の輸送においては高地の駄獣（リャマ）が重要な役割を果たす。17世紀になるとラバが登場する。「生態学的階床と垂直列島の最大限を利用する」という考えは、アンデスの農業を理解するためのカギのひとつである［Morlon 1996: 120-121; Troll 1980:34-38,42］。

[14] ルパカがプレインカ期において、ティワナク文化圏に所属したことはこの地域を知る上で重要である［Meiklejohn 1988:23］。

[15] これは、ペルーの統治者ガルシア・デ・カストロ（Lope García de Castro. 在位1564-69）の命令によって行われた、1567年のスペイン人巡察使ディエス・デ・サンミゲル（visitador Garci Diez de San Miguel）による調査［Diez de San Miguel 1964］から判明した。ルパカ人（los Lupaqa）はアリカのリュタ谷（el valle de Lluta en Arica）からサマ（Sama）やモケグア（Moquegua）にかけての太平洋沿岸部に「オアシス」を所有。そ

病の流行のさいとか、アルティプラノの気候上の危機（寒冷による影響）のさいにもアンデス山脈東方の低地渓谷部ユンガスは一時的な避難場所としてもまた注目の的であった。例えば、1589 年から 1597 年にかけて流行した天然痘やはしか（麻疹）（epidemia de viruela y sarampión）から逃れるために高地の住人は低地の渓谷部に避難した。天然痘やはしかは寒冷地では流行るが、低地では収束したからである［Saignes 1987:113-114; Troll 1980:16,22-23,43; Dollfus 1996; Salles 2001:33-34］[16]。

３．各拠点地域の出現と先住民カシケ

各拠点地域はコスタ、シエラ、セルバに多数存在した。シエラのクスコ、ラパス、オルロ、コチャバンバ、チュキサカなどの諸都市は地方の中心であり、ポトシ市と商業的結びつきを強めた。これらの都市ではスペイン人商人や輸送業者、カシケらがその商業活動を広い地域にわたって展開した。カシケの一部は植民地経済に組み込まれ、先住民を支配する存在へと変貌する。商品を入手したり交換するため市場に接近することが認められた。他方で、先住民共同体の統治者として貢納の徴収やポトシ銀山へのミタ徴集が義務づけられた［ワシュテル 1984:183-184,190-193; Spalding 1974: 37］。

カシケは土地や農場を手に入れようとした。支配者から課せられた貢納の支払い義務を果たすために、あるいは私的な利益を求めて。自身の共同体から遠く離れたところ、特にラレカハ（Larecaja）、シカシカ両地方の渓谷部、モケグアやアレキパ地方の渓谷部などに換金作物、商品を求めて触手を伸ばした。作物や商品をポトシ市場に運びそこで売却した。コカやぶどう酒、アヒ（ají. トウガラシ）などに人気があった。コカとぶどう酒の単価は、第 2 表の如くであった。1585-1649 年の期間、食糧品単価のうちコカの平均単価は「7.75 ペソ」、ぶどう酒は「13.53 ペソ」と算出される。この数値を、「ポトシにおける商品の消費とその価格表（1603 年）」［真鍋 2011:73］とつきあわせたとき、単価の面でぶどう酒を抜いているのはチャルキ（干し肉）（25 ペソ）、野菜（60 ペソ）、果物（300 ペソ）で

こでトウモロコシや小麦を生産しグアノ（wanu）を獲った。さらにルパカ人はセルバやさらに遠方にも触手を広げ、コカを収穫しラレカハ（Larecaxa）の森を開発していた［Murra 1996:126-128］。海抜高度 3800m 以上の高地に位置するルパカは年間平均気温が約 8ºC（最高が 14ºC、最低が 2ºC と幅がある）であり、夏には 800mm ほどの降雨がある。塊茎（tubérculos）の栽培と南米ラクダ科家畜（camélidos sudamericanos）のリャマ、アルパカを飼育した。食肉（carne/charqui）と採毛（lana）のほか、リャマは駄獣としても使用された。また商業・輸送業に従事し幹線道沿いの宿営（tambo）の維持にも尽くした［真鍋 1995:20-23,32-35］。

[16] スペイン人が新大陸にもたらしたものの一つが病気であった。ペルーの先住民は早くも 1524 年に天然痘とはしかの影響を被ったとされる。この時点でスペイン人征服者はまだペルーに到着してはいなかったけれども、パナマから南にウイルスが伝わり、そのせいでインカ王ワイナ・カパック（Huayna Cápac）や王家の家族が伝染病に罹り命を落としたとされる。そしてこのことが（ワイナ・カパックの後継者であった）嫡出子ワスカル（Huáscar）と非嫡出子アタワルパ（Atahuarpa）の間に戦いをもたらし、この混乱に乗じて、フランシスコ・ピサロとその征服軍はペルー（インカ）の征服を成し遂げた。その後ペルーではインフルエンザ、チフス、ペストなどが到来・流行し、先住民人口が激減する。（アンデス高地では、蚊がもたらす病気であるマラリアや黄熱病からは逃れられた。）［Robins 2017:36-37; Rowe 1998:518-519］。植民地時代における伝染病の流行に関しては、第 3 表参照。

あるが、「ポトシ市場に投入された合計額」の点ではぶどう酒（合計額：50 万ペソ）には全く及ばない。同様にコカとの比較でみると、砂糖（8 ペソ）、保存食品（10 ペソ）、サトウキビの蜜（8 ペソ）、チャルキ（干し肉）、イチジク（12 ペソ）、オリーブの実（10 ペソ）、オリーブ油（8 ペソ）、野菜、果物がコカを抜いている。しかしぶどう酒の場合と同様「合計額」の点でコカ（合計額：36 万ペソ）には到底及ばない（上記のペソの単位はすべて「pesos ensayados」である）[17]［Choque Canqui 1987: 357-358 ; Sempat Assadourian 1982:156; 真鍋 2020:89］。コカはセルバでしか生産できなかった。クスコとラパスのユンガス（yungas. アンデス山脈東部セルバの熱帯性渓谷部であり、海抜高度が約 500m から 1800m で豊富な降水量を誇る。年間降水量は 1500 mm から 7000mm）［Dollfus 1996:22,24-25］に人々は注目した。コカは高山病（soroche）・寒さ・空腹対策に有効であった。

チュクィート地方やオマスーヨス地方コパカバーナ（Copacabana de la provincia de Omasuyos）、パカヘス地方ヘスス・デ・マチャカやグアリナ（Guarina o Huarina）などの村のカシケは、コスタやセルバの遠隔地において農牧地を運営しており、その産物をポトシ市場に提供した［Choque Canqui 1987:358-359; Sempat Assadourian 1982:190］。

III　市場経済の浸透と先住民

17 世紀になると市場経済の浸透が顕著となった。ぶどう酒とコカの流通を基軸に市場経済の浸透の実情をみておく。ポトシのミタの抑圧の中、先住民の中には元の共同体を離れ、よそ者（forasteros）となって生きる者が増えるが、その経緯を市場経済の浸透とも絡めて検討する。先住民社会に少なからず変化が訪れる［Klein 1995: 28］。

１．市場経済の浸透

本節では、ぶどう酒とコカを中心にとりあげて、ペルー副王領南部地域に市場経済が浸透していった状況を考察する。

[17] とはいえ、「合計額」が大きかったという理由だけでそれが換金作物（現金収入を目的とした農作物）たり得たかというと、否である。合計額の高さから言うと、第 1 位の小麦粉（164 万ペソ：pesos corrientes）や第 2 位のチチャ酒（102 万ペソ：pesos ensayados）があげられるが、単価（それぞれが 1 レアル、8 レアルであった）の面からみても換金作物とはいえない。とくに小麦粉の場合、合計額のペソの単位（pesos corrientes）から判断して、市場経済がそれほど浸透していない地域を含めてじつに広範囲からポトシに供給されたものと判断できる。なお、ペソの価値を比較すると、「peso ensayado（約 450 マラベディ /maravedíes）」は「peso corriente (272 マラベディ)」の 1.65 倍である［真鍋 2020:75,89］。

（1）アレキパ、モケグア地域のぶどう酒（地図3）

1539年頃からスペイン人がアレキパ地域に定住し始め農園を営むようになった。1540年8月にアレキパ市（Ciudad de Arequipa）が建設され、翌年1月にはアレキパ市にカビルド（cabildo. 市参事会）[18]が設置された。アレキパ市にはリマ財務府（Caja Real de Lima）の支部がおかれた。1548年、（副王不在期の統治者である）ペドロ・デ・ラ・ガスカ〔Pedro de la Gasca. tercer gobernador. リマ・アウディエンシア議長（presidente de Audiencia de Lima）。在位1548-1550〕の統治期、アレキパにコレヒミエント（corregimiento/provincia. =「地方」）が導入されはじめる。1557年、カマナ（Camaná）のコレヒミエントが成立。1565年にはガルシア・デ・カストロ（Lope García de Castro. cuarto gobernador. リマ・アウディエンシア議長 / 在位1564-1569）によって3つのコレヒミエントが設けられた。コリャガス（Collagas. アレキパ東方）、コンデスーヨス（Condesuyos）、アリカ（Arica）の諸地方（provincias）である。数年後にはコレスーヨス（Colesuyos. アリカ北方）地方が誕生した。1626年にはモケグア市（Ciudad de Moquegua）が設立されモケグア地方の中心となった。アリカ地方の海港都市アリカ市は1587年に設立され、リマとアルトペルー間の交易の中継点となった。教権の面では1609年にクスコ司教区（Obispado de Cuzco）からこの地域が分離してアレキパ司教区（Obispado de Arequipa）が設けられ、カマナ、アレキパ、コンデスーヨス、カイリョマ、モケグア、アリカ地域等を宗教面から統括することになった。各派修道会も進出した［Brown 1986:12-14,17,19］。

1557年頃、アレキパ市の西方約40キロの地点にあるビトル谷（Valle de Vitor）においてブドウ園を営む者が現れ、たちまちブドウ栽培とぶどう酒生産がセットになって発展する（el sistema vitivinícola）[19]。それは他の温暖な渓谷部にも広がった［Glave 2000:165］。聖俗のスペイン人事業主による、ぶどう酒生産は軌道に乗り、この地域の白人の経済基盤となる[20]。大量のぶどう酒がモケグアやアレキパの渓谷部から駄獣リャマに積まれて、シエラの市場に送られるようになった。ブドウ園の運営やぶどう酒生産は自然災害や疫病の流行による労働人口の減少に規定されたほか、ぶどう酒市場価格の変動にも左右された［真鍋 1995:115-117］。

---

[18] アレキパ市のカビルドには2人の市長（alcaldes ordinarios）、6人のレヒドール（regidores 市参事会員）、数名の役職者（alcalde de aguas、fiel ejecutor、alférez real etc.）が配置された。

[19] ブドウ栽培地とワイン醸造地（ワイナリー）は基本的にほぼ同一場所に立地した。

[20] アレキパ地域の人口に関しては、16世紀ではまとまった詳しい記録が見あたらない。18世紀の断片的な記録から推測するほかない。例えば、1754年のアレキパ司教区6地方の先住民人口について、カシケ129人、貢納納入者（18歳から50歳までの成年男子）4250人（内訳：共同体成員3483人、フォラステロ767人（女性･子供を除く）とある［真鍋 1995:105］。18世紀末の「アレキパの人口」として白人2万2207人、メスティソ4908人、先住民5099人、自由な身となった黒人と思われる人々（gentes de color libres）2487人、黒人1225人の記録〔副王ジル・デ・タボアダ・イ・レモス（在位1790-96）の命令で行われた人口統計に基づく〕である［Málaga Medina 1987:158］。人口構成の面では16世紀から白人人口が圧倒的に多かったことは確かである。

ぶどう酒生産の主要舞台は太平洋沿岸部の温暖な渓谷部であった。カマナ、アレキパ、アリカ、タラパカ（Tarapacá）、アリカの諸地方を流れるタンボ川（el Tambo）やカマナ川[21]、内陸の渓谷部ではマヘス谷（valle de Mages）[22]、ビトル谷、モケグア谷、シグアス谷（valle de Siguas. ビトル川の支流。アレキパ地方）、ロクンバ谷（valle de Locumba. アリカ地方）が中心であった[23]。

ペルー南部海岸と、クスコとポトシを幹線道が結ぶシエラ・ラインとの間に交易網が形成され、ぶどう酒ほかの商品取引が盛んになる。当初、アレキパ地域の経済活動は海岸渓谷部の農業であった。ジャガイモ、トウモロコシ、オルコ（ollucos. 食用の塊茎。バセラ科ウルクス属の一種）などが栽培され、次にサトウキビ、ブドウ等の果樹栽培が登場する。ブドウはぶどう酒やその蒸留酒であるアグアルディエンテ（aguardiente. ブランデー[24]）に加工される。アレキパ市は物資の送付地となった。また副王領北部や首都リマから海路で運ばれてくる商品の多くが当市に集められ、それは輸送業者によってアルトペルーの鉱業地帯に送られた。アレキパ市やアリカ市は南部海岸地域の商業、輸送業、手工芸の中心地となった。その影響はポトシを越えて遙かリオ・デ・ラ・プラタ（現北西アルゼンチン）にまでもおよんだ［Málaga Medina 1987:155-157］[25]。

ブドウ園・ぶどう酒産地における労働者人口を考える際、アレキパ司教区はシエラに比べると先住民の人口規模が比較的少なかったうえに、1550 年代から 1620 年にかけて天然痘やはしか（麻疹）などヨーロッパ人がもたらした病気の流行で先住民人口が 20 万人から 3 万 3500 人にまで減少したといわれている。そこで 16 世紀後半からブドウ園の労働力を黒人奴隷に転換し、残りを先住民労働力で埋め合わせるようになった。しかしその後も伝染病（インフルエンザ）の影響にさらされ、ブドウ園では労働力が不足するという事態に陥った。そこで、遙かアルティプラノの先住民労働力を求めるという事情が生まれた［Brown 1986:12］。

（2）ラパス・ユンガスのコカ

ポトシ市場へのコカの提供は、クスコとラパスの両ユンガス地帯から行われた[26]。コカは先スペイン期から先住民が重宝してきた産物であったが、両地域に到来したスペイン人

[21] 灌漑によってブドウのほかに砂糖、蜂蜜、オリーブ油、アヒ、綿花などの栽培も行われた。
[22] マヘス谷にあった大農園サカイ･ラ･グランデ（Sacay la Grande）はイエズス会所有の最大級のブドウ園であった。1990 年代に筆者は当農園跡を調査した経緯がある［真鍋 1995:119］。
[23] シエラ寄りのカイリョマとコンデスーヨス両地方は気候が寒冷で生産力は著しく低かった。作物の種類は限定され、ブドウなどの換金作物を対象とする農業には不向きであった。
[24] 18 世紀以降主流となる［真鍋 2013］。
[25] 17、18 世紀になるとカイリョマ、コンデスーヨス、タラパカ（Tarapacá）において銀の富鉱が発見され鉱業も発展する。
[26] クスコ地域からチャルカスへのコカの提供量も多く、1592 ～ 94 年ごろには年間に 6000 かご（cestos）に達したといわれている［Choque Canqui 1987:361］。

征服者によって（現地の先住民共同体と並んで）コカは生産・販売されるようになった。例えばクスコ地域の場合、スペイン人のコカ農園主としてエスキベル一族、後のバリェウンブロソ侯（los Esquivel, futuros Marqueses de Valleumbroso）一族が知られる［Glave 2000:163-165］。しかし本節ではラパス・ユンガスのケースについてみていくため、クスコ地域の状況にはこれ以上はふれない。

東コルディレラ山脈東部支脈の熱帯渓谷で獲れるコカはインカ時代から知られていた。ソンゴ渓谷（el valle de Zongo/Songo）からは年間に数千袋のコカがシエラに提供されていたという。植民地時代になると、この地域はアルティプラノで消費されるコカの主要産地としていちだんと名を馳せるようになった。

多民族が暮らすラパス・ユンガスにおけるコカ生産の主要拠点は、北西から南東にかけてみていくと、まずラレカハ地方東部に位置するソンゴをはじめチャリャナ（Challana）、チャカパ（Chacapa）、続いてシカシカ地方東部に位置するコロイコ（Coroico）、チュルマニ（Chulumani）、スリ（Suri）である（地図 4、地図 5）［Angelis-Harmening 2000:21,28-29; Parkerson 1984:11,14-17］。

植民地時代になってコカの生産量は上昇する。ポトシ銀山の出現以降、鉱山で働く先住民労働者間で需要が伸びたためである。16 世紀末、ポトシの鉱区には数万におよぶ労働者（ミタ労働者と契約労働者を合わせて）がいた。また 17 世紀に入って開発されることになったオルロ銀山にはおよそ 3 万人の労働者が押し寄せており、コカ需要に拍車がかかった。コカはしばしば現金の代わりとして先住民労働者の俸給に用いられた。また商業の活性化に伴いコカは、スペイン人同士の商取引でも現金の代わりとして用いられるほどの人気ぶりであった。

ラパス・ユンガスの先住民共同体から貢納が現物のコカで徴収されるようになったのは 1540 年代からである。当初、ラパス・ユンガス全体から徴収された貢納はコカ 5300 かご[27] に達したといわれる。1560 年ごろ、ソンゴからスリにかけての 3 つの渓谷部一帯にエンコミエンダ（encomienda）[28] が浸透した。そのエンコミエンダの多くはラパス市のスペイン人によって所有された。

16 世紀末から 17 世紀初めにかけてアルティプラノでは伝染病が流行し人口減少が起きた。1650 年代以降、ポトシ銀鉱業が衰退期に入ったことにより、ラパス・ユンガスからシエラへのコカの供給量が減少する。しかしアルティプラノからユンガスへのスペイン人

[27] コカ 1 かご当りの重量は 8kg から 10kg。

[28] エンコミエンダ制とは、新大陸征服過程でスペイン王権が征服者に一定数の先住民の支配・管理を委託した制度。王権はエンコメンデーロ（encomendero. エンコミエンダの所有主）に先住民の保護とキリスト教化を義務づける代わりに貢納の徴収権と賦役権（ミタ）を与えた。だが、時代が進み王権による植民地支配が軌道に乗ってくると、エンコミエンダはその役割や権力を削がれていく［網野 2017:33-34］。

の流入は依然として続いていた。いっぽうでユンガス内部では未開発の渓谷部へとスペイン人農園主は開拓先を広げていった。その後アルティプラノではラパス市にスペイン人が集中したため、その影響はユンガスにもおよび、多くのスペイン人がユンガスに流出する［Klein 1987:3-5］[29]。

２．先住民

17 世紀になると、貢納は物納から銀（貨幣）による納入になっていた。共同体先住民は何としても貢納額を稼ぎ、カシケを通じてコレヒドールに納めねばならなかった。先住民が貢納額を稼ぐ方法は一般的には、自らの産物の余剰を都市などの市場に売却してその代価を得るか、もしくは余剰労働力をもっぱら白人が経営するアシエンダや商業・輸送部門などに提供して賃金を得るかであった。貨幣経済への先住民の参加は、まず貢納の銀納化を契機に始まったと考えられる［真鍋 2019:91-93; 真鍋 2020:83-87; Klein 1995:27］。先住民は貨幣経済への依存を強め、財に対する価値観念の転換を迫られた。

ポトシ銀山のミタ徴集はコレヒドールの命令で、カシケの手で行われた。17 世紀を通じてミタ免除金の支払いによってポトシ銀山のミタを回避する者が続出するとともに、アルティプラノの先住民共同体成員人口は激減していく。チュクィート地方やパカヘス地方ではこのことが顕著になった。チャルカスでは共同体員人口のおよそ半分以上が「消失」していたとされる。そうした先住民の一部がシエラからラパス・ユンガスに流出した［Saignes 1985:6-7］。

市場経済が浸透していく中で先住民の行動様式にはかつては見られなかったような大きな変化が生まれた。アレキパ司教区のブドウ栽培・ぶどう酒生産、ラパス・ユンガスにおける先住民労働力の需要に応えてアルティプラノから多くの先住民が進出する。

ところで、カシケはミタの徴集を行う（義務）いっぽうで複数の事業に手を染めるようになっており、配下の先住民を自らの事業に投入した。この義務の履行と、起業家精神に基づく行動意欲とは矛盾していたというべきである。換言するならば、カシケにとっては義務をなるべく少なくし、事業家として尽力したかったはずである。

カシケが農牧畜業、ぶどう酒やコカの取引、商業・輸送業に従事する事業主であったことに加えて、彼らがスペイン人有力者（商人や植民地官僚）と商業面で賢固な関係を築く

[29] このことは、18 世紀末、ラパス・ユンガスのチュルマニへのアシエンダの集中がアルティプラノの他の地域に比べて圧倒的規模に達していたことからも伺われる。ちなみに、アシエンダの分布を多い方から順に見ると、1 位チュルマニ（336）、2 位ラレカハ（270）、3 位シカシカ（206）、4 位オマスーヨス（170）、5 位パカヘス（90）となる。（　）内の数字はアシエンダの件数である。また先住民人口については、1786-1797 年の場合を多い順に見ていくと、1 位パカヘス（44,777）、2 位オマスーヨス（43,075）、3 位シカシカ（41,542）、4 位ラレカハ（39,946）、5 位チュルマニ（31,004）であった。（　）内の数字は人口規模（単位：人）である。上記のいずれも、クラインの研究による［Klein 1980:198,208］。

ことも珍しくはなかった。またメスティソのカシケとか、女性のカシケも登場するようになった[30]。

パカヘス地方のグアキ（Guaqui）、ヘスス・デ・マチャカ、オマスーヨス地方アチャカチ（Achacachi）、チュクィート地方アコラのカシケが、ソンゴ、チャリャナ、チャカパの村々に逃亡していた先住民を探索するためユンガスへ頻繁に訪れていたことが知られる（1595年）。そのいっぽうでカシケが労働者をポトシに送る代わりに、ミタ免除金[31]を支払って、ミタの免除をはかるケースが増えた。それは「銀のインディオ（indios de plata）」とか「ポケットのインディオ（indios de faltriquera）」として知られる。共同体の人口が減少しミタの徴集が難しくなるのに伴い、ミタの免除志向はいっそう高まった。「ポケットのインディオ」はこれまでも歴史家によってふれられてきた。共同体から集められたこの現金はポトシにおいて熟練労働者雇用のために使われた。1672年にペルー副王レモス伯（Pedro Antonio Fernández de Castro, Andrade y Portugal, Conde de Lemos, XIX Virrey. 在位1667-72）はチュクィート地方フリ村のイエズス会士が、共同体への残留を望む人々に支払うために、ポトシにかなりの現金を送っていたと指摘した［Premo 2000:82-83］。17世紀後期になると、現金によるミタの決済が加速していく［Mangan 2005:163］。

ポトシのミタ奉仕を逃れた先住民がラパス・ユンガスに多く流出したが、とくにユンガスのチャリャナ村にはかなりな人数の逃亡者が住み着いていたという。

先住民共同体において男性が「消失」した後にとり残されたのが女性である。チュクィート地方では早くも1560年代から男性人口の減少によって男女の性別構成比に影響が出ていた点に先に言及したが、この状況は17世紀ではいちだんと加速する。そして貢納の納入面で女性の役割が高まったことは間違いないようだ。例えば17世紀のチュクィート地方では、共同体に残った女性が男性に代わって貢納を支払ったとプレモは指摘している。ワマン・ポーマ（Felipe Guamán Poma de Ayala. 16後半から17世紀初期）が国王フェリペ2世（Felipe II. 在位1556-1598）に宛てた書簡中の記述に、そうした記録があることを指摘している［Premo 2000:81］。

---

[30] 18世紀のトゥパック・アマルの反乱においてその総指揮者であったホセ・ガブリエル・コンドルカンキ（José Gabriel Condorcanqui, Túpac Amaru）はメスティソのカシケであった。また反乱に加わった、ティンタ地方ヤナオカ村のカタリナ・サラスやキスピカンチス地方アコス村のトマサ・ティトゥ・コンデマイタは女性のカシケ（doña Catalina Salas, cacica de Yanaoca de la Provincia de Tinta y doña Tomasa Tito Condemaita, cacica de Acos de la Provincia de Quispicanchis）であったことが想起される［O'Phelan Godoy 1985:214; Flores Galindo, 1987:127; 真鍋 1995:215］。

[31] 労働者1人につきおよそ30ペソ（pesos ensayados）支払ったとの記録がある。

Ⅳ　17 世紀ポトシ銀鉱業におけるミタ労働者の減少とその影響

本章では、前章でふれたミタの抑圧に苦しむ先住民の状況をいちだんと深化して考察しよう。採鉱部門はもとより、とりわけ精錬部門において先住民は過酷な労働を強いられた。その結果、ミタヨの人数が激減する。その主因は、1570 年代からの水銀アマルガム法精錬の導入と密接に結びついていた。その実情をみていくと、ポトシにおける水銀中毒症蔓延の実態が浮上する。ミタヨの激減はポトシ銀鉱業の下落を招く。

１．ポトシのミタ労働者の生存環境の悪化

副王トレドによるミタの再編直後、北はクスコ、南はタリハにまでおよぶアルティプラノの 16 地域から集められた 13500 人（年間徴集数）がポトシのミタに従事した。ポトシでは「鉱山の大判事（alcalde mayor de minas）」が各鉱山業者からミタ労働者の受給申請を行わせ、人員配分を調整した。一方、ミタの先住民を送り出す側である各先住民村では、カシケがミタ対象者を選出しポトシに派遣した。先住民は採鉱部門ならびに精錬部門に投入された［Robins 2011］。

ポトシの鉱山業者・年代記作者ルイス・カポーチェ（Luis Capoche）が鉱山事情を詳細に記録した 1585 年［Capoche 1959］から 17 世紀初期にかけてのミタ徴集数の変動については、セーニュの論考［Saignes 1987:148-154］がある。それをみると、ミタヨの減少は甚だしい。元の共同体から離脱した先住民は、スペイン人のアシエンダなどに流出した。あるいはミタ終了後ポトシに残留した者も多い。共同体を離脱した者は「フォラステーロ（よそ者）」、「ヤナコナ」[32] となった。その主な逃亡先はラパス・ユンガスであった［Robins 2011］。

ポトシのミタ労働者減少の主因は、労働環境が悪化した点にある。それは、副王トレドによる水銀アマルガム法の導入と密接に結びついていた。水銀アマルガム法の導入後、とくに精錬所[33] で働く労働者に大きな影響が及んだためである。

精錬所において労働者の生存環境が著しく悪化した。それは水銀の作用によるものであった。ワンカベリカ水銀鉱山において水銀がもたらした悲惨な情況についてはすでに考察した［真鍋 2006］が、ポトシにおける水銀の被害情況も過酷なものだったのである。それはロビンズによって指摘されている［Robins 2011:73-99］。

---

[32] ヤナコナとは先スペイン期においてはアイユ（ayllu. 先住民共同体の親族的血縁集団の最小の行政単位）に所属せず、専門職に従事した先住民であった。スペイン征服後もその身分は継承され、スペイン人に私的に献身したとされる［Bakewell 1984:199］。その概念は、網野徹哉によって分析・説明されている［網野 2017:33-58］。

[33] ポトシにおける精錬所の数について、1593 年には 108 あり、そのうち 49 がリベラ川沿いにあったという［Robins 2011:127］。

ミタの先住民はセロ・リコとリベラ川との間に設けられた先住民労働者住宅（rancheria）に居住させられた。月曜の朝、ワイナポトシ（Huayna Potosí）の丘に集合させられた彼らは、行政官、検察官（veedores）、鉱山業者（採掘・精錬業者）らによって作業場所を決められた。検察官はまたポトシ市内の主要広場に出向き、ミタ免除金をカシケから徴収した。副王トレドによるミタの再編後、1578 年から王権の期待通りになった。坑内では採鉱の後、アピリス（*apiris*）と呼ばれる労働者が鉱石を約 45kg ずつ袋（sacos）に詰め、鉱石搬出人〔＝バレテーロ（*barretero*）〕がそれを肩に担ぎ、地表に運んだ。彼らにはノルマが課せられ、作業効率が落ちるとむちで打たれるなどスペイン人から虐待を受けることも頻繁であった［Robins 2011:73-74,197-204; 真鍋 1995:15-16］。地表において銀鉱石は、数百人のパリリス〔*palliris*（銀鉱石を選り分ける賃金労働者[34]）〕によって分類された。その後鉱石は駄獣の背に積まれ、精錬所に運ばれた[35]。

採鉱部門での労働状況をみてみよう。坑内の曲がりくねった暗くて狭い場所での労働は過酷を極めた。方向感覚の麻痺、有害な空気に労働者は悩まされた。ラプラタ（チャルカス）司教区・第 2 代司教ドミンゴ・デ・サント・トマス師（fr. Domingo de Santo Tomás. ドミニコ会士。司教在位 1562-1570）は、ポトシ鉱山を「毎年スペイン人の我欲の生け贄となる多くの人々を飲み込む地獄の入り口…」と書いた。またこの鉱山を訪れたある植民地官僚はその坑内を「海面状金属の空間」と描写し、また別の役人は「数え切れない入り口をもったミツバチの巣である」と述べている [Robins 2011: 74-75]。坑内の労働環境は絶悪であり、労働者は酷使された。鉱山主はすべての労働者に坑内を照らすためのろうそくを提供したが、獣脂製の蝋燭は空気を汚し、労働者の呼吸器系に害をもたらした。しかも蝋燭は労働終了時までもたず、途中で燃え尽きた。そのために労働者は蝋燭を自前で購入しておかなければならなかった［Garavaglia 2000:131; Robins 2011:80-81］[36]。

次に精錬所での労働状況をみていこう。ミタヨはまず、鉱山から運ばれてきた銀鉱石を分類した[37]。次にそれを細かく粉砕する。碾いた鉱石の粉末を別の場所に移す。それに水銀を混ぜて鉱石のミックス塊（torta. アマルガム塊）を造る。その塊を素足で踏み続ける。アマルガム塊を洗う。そして最後に銀塊を取り出した [Robins 2011: 74,81]。

精錬所の粉砕機（molinos）は銀鉱石の微粒子にまみれており、労働者がそれを吸い

[34] 通常は坑道の入り口付近で働いた。1 交代につき 5 レアルを稼ぐ［Robins 2011:202］。

[35] 1 頭のラバが運んだ鉱石の重量は約 57kg。1 頭のリャマが運んだ重量は約 27kg であったという。ラバとリャマの力の相違は歴然としている。第 2 表を見るとリャマの単価が 1614 年以降下がっているのは、17 世紀においてはラバが他を圧して役畜（駄獣）の主役となってきたこととも関係がある。18 世紀になるとラバはレパルティミエントにおける割り当て品の中で首位を占める重要商品となる［真鍋 1995:108-109,157,185,248］。

[36] 坑道の入り口では労働者の妻がコカやチチャ酒などを夫に提供。商人もそれに加わった。銀鉱石は物々交換の対象ともなった。それは市内の中央広場に隣接するクォーツ広場に運ばれそこで売られもした。

[37] 銀鉱石はその堅さと色によっていくつかに分類された。パコス（pacos）は赤みがかっていて酸化が著しい。ソロチェ（soroche）は赤くて鉛を含む。ネグリーリョ（negrillo）はピンク色で堅くて硫化物を含む。鉱質が良好であった。ムラトス（mulatos）は茶色く半分酸化、半分硫化したものであった。

込むと人体に悪影響を及ぼした。1630年にイエズス会士・年代記作者のベルナベ・コボ〔(Bernabé Cobo. 1580（82)-1657[38]〕は、「粉砕機は多くの部屋を持った巨大な家である」と書いた。鉱石はモルティリス（*mortiris*）と呼ばれるミタヨによって粉砕機の中に放り込まれ粉砕された[39]が、そのさい、大量のほこりを発生させた。ほこりは雲状になって空中を漂った。コボは、「かくも大量のほこりが出たおり……そこで働く人々は、ほこりを吸い込まないように木綿やウールで鼻を覆ったり口に革の袋をあてる。ほこりには…金属やたいへん有害なものが含まれている」と記した［Robins 2011:81-82］。

砕かれた鉱石はカホン（cajón）と呼ばれる大きな石の囲いに入れられ、水銀や水と混ぜ合わされ、次に触媒が加えられる。精錬工程には細心の注意が要求された。具体的にその手順を見てみよう。まずカホンに約2268kgの砕かれた鉱石が入れられる。それから労働者は226kgから272kgの塩と水を加えた。その後、銀鉱石の質に応じて91kgから227kgの水銀を投入した。これは布地を通じて捻り出されまき散らされた。そして混ぜ込まれた。パコス（*pacos*）のように純度の高い鉱石だと、水銀は少なくてよかったが、ネグリーリョ（*negrillos*）のように混ざり物が多い鉱石（亜硫酸塩、鉛、スズ、鉄を含んだ）の場合はいっそう多くの水銀と石灰が必要だった。いずれにしても、塩、水、水銀がカホンの中に入れられた後、鉱石の質に応じて石灰・鉄（スペインのビスカヤから輸入されたもの）・スズもしくは鉛・銅（黄鉄鉱）の粉末が加えられた［Robins 2011:84］。

上記のものがカホンの中で混ぜられ、その混ぜられた塊が石でできたパティオ（patio/buitrón. 囲い）の中に広げられた。それは長さ12m、幅3m、高さ2ｍくらいの空間であった。そこは10から50個ほどの鉱石のミックス塊を収容できた。当初はそれが加熱によってアマルガムが加速される仕組みであった。しかしやがて燃料の調達がうまくいかなくなり、1580年代になると「冷却」システムに変更された。この方式が植民地時代の終わりまで維持され、それは「パティオ法」と呼ばれた。冷却システムは熱を用いなかったので比較的安価であった。しかしこれがミタヨに悪影響を及ぼした。というのも、ミタヨはアマルガム化を促進するために、すなわち、粉砕した銀鉱石のミックス塊に水銀を十分にしみ込ませるために、「レパシリス（repasiris）」と呼ばれるミタ労働者がパティオの中に入り、3から4週間にわたってそれを踏み続けねばならなかった。まずパティオに広げられたミックス塊をならすために、ミタヨが膝まで浸かった状態で素足で一斉にそれを踏みしめる作業が始まった。それは「レパソ（repaso）」と呼ばれた。このことが作業員の健康にはかり知れない害悪を与えたのである。踏み石の隙間から水銀が流出したからである。最後に

[38] ベルナベ・コボは1596年新大陸に渡る。1599年リマに到着。1615年フリのイエズス会伝道村に入った。
[39] 年代順にみると、その動力源は人力、リャマ、ラバなどの畜力、そしてカリカリダムから運ばれてきた水の力（hidráulica del sistema de lagunas y acueductos del Karikari）へと変化した［Garavaglia 2000: 131］。

蒸発させること（vaporización）で水銀をアマルガムから分離した。上記の過程でミタヨは長期間水銀にさらされることになった［Garavaglia 2000:137; Robins 2011:85-86］。1629年に聖職者オニャーテ（Pedro de Oñate）は、「水銀の影響がいかに恐ろしいものか、それが人の健康や生命にとっていかに危険なものか、大桶の中を歩くとき多くの人々が水銀中毒にかかる……」と述べている。

ポトシでは数万トンの水銀が蒸気となって空中に放出されていたから、精錬所で働くミタヨだけが水銀中毒に罹ったとは考えにくい。ポトシにいた人々の多くが水銀中毒と無縁ではなかったはずである。当時、同時代人による水銀中毒症への言及はほとんどなされていないが、水銀による中毒が日常茶飯事だったために、通常のこととして片付けられたのかもしれない。また病気や精神疾患を患った人々の一部は回復のために、暖かい土地を目指して移動したともいわれている。当時ポトシにいた人々は、水銀中毒に罹った者の一般的症状として体の震えや歯を無くすことを認めていた。当時ポトシでは水銀中毒症が蔓延していたことは確かである。市内を流れるリベラ川の水を飲んだ多くの先住民が死亡したり、また浅い井戸を掘って、その水を飲んだところ、「ひどい病気に罹って多くの人が死んだ」との報告がある［Robins 2011:149］。

ポトシにおいて水銀中毒に罹った者の状況を見ておこう。以下は、ロビンズの著書の該当部分を要約したものである。

「水銀中毒に罹った者はたえず興奮していた。注意がおろそかになり、慢性的に不眠症に陥っていた。他の者は足を引きずって歩き、気力がなく呆然として震えていた。恐怖感を完全に喪失している者もいた。また他の者は不安、半信半疑、優柔不断、恐怖にさいなまれ消耗していた。ある者が突然歓喜の声をあげたかと思うと、続いて憂鬱で空虚な状態に追い込まれた。またある者は絶えずいらいらし、執拗に他人のあら探しをした。そして暴力をふるった。頭痛に襲われ悪臭のある息を吐いていた。高血圧に襲われきわめてスローな肉体的反応、不明瞭な話し方、ノイローゼ、神経質で混乱した様子が目立った。通りと広場はけが人や精神疾患を負った人々であふれかえっていた。手足がなく誕生した幼児がいたり、知的障害児もいた。中毒に罹った人が身震いし、よだれを垂らしながら通りを彷徨っていた。このような「奇行」はポトシの市中だけなく、中毒に罹った人々がポトシから移動した先の都市や町でも見られた。ポトシでは極度の無秩序が流行し蔓延した。皮肉にも多くの人々が、よだれを垂らし震えるミタヨを傍観していた。ミタヨが中毒に罹っているのを認めていた。しかしながら、ミタヨ本人は自身の不眠の理由や短気に陥る理由を正確に知ることはなかった［Robins 2011:147,149-150］」。

ポトシの銀精錬に水銀アマルガム法が適用されるようになって以降、ワンカベリカで生産された水銀の多くがポトシの精錬所に運ばれた。ポトシの精錬部門において用いられた

水銀がそこで働く人々に及ぼした被害は筆舌に尽きる。ポトシの人口の多さからいっても、水銀がポトシの人々にもたらした影響は計り知れない。水銀はその性質から無機水銀と有機水銀とに分けられる。水銀は他の鉱物や微生物と容易に結びつく。またその蒸気は空気中に流れ、ひいては上昇して大気圏にまで届き、降雨によって地上に降り注ぐ。食物を通じて、また皮膚からも水銀は人体に入る。水銀は人間の神経組織、腎臓をはじめ人体のあらゆる場所に甚大な被害を及ぼした。その毒性はこれまでに広く知られてきたところである[40]。ポトシにおいて水銀中毒による死者の数は高まり尽きることはなかった。珪肺症（silicosis. 石材・金属の粉塵を吸って起こる病気）の影響も後をたたず、ポトシを去ってからも人々はこの病気で苦しんだのである［Robins 2011:99,103-106,140; 真鍋 2006］[41]。

２．ミタの回避やその影響など

ティティカカ湖南西岸の幹線道沿いに位置するチュクィート地方（ルパカ）は先住民の濃密な人口を擁し、7つのいずれの村もポトシ銀山のミタに奉仕した。ポトシのミタを強いられたアルティプラノの16地方のなかで、チュクィート地方からの徴集規模は最大であった（同地方は元から先住民人口の密集度が高くその人口は圧倒的規模に達していた）［López Beltrán 1998:206］。当地方のオリヒナリオ（originarios. 共同体員）の人口中に占める貢納納入者人口（18歳から50歳までの成年男性人口）は、1578年と1684年のあいだに74％減少した。つまり1578年に1万7779人であった貢納納入者人口は1684年にはわずか4538人にまで減少していた。この原因は、ポトシに出かけたチュクィート地方出身のミタヨの多くが元の村に帰らなかったことにあった。ポトシで死亡した者も多い［Premo 2000:66,69］。この地方は早くからポトシのミタに服してきており、副王トレドの登場以前の1560年代からその影響がすでに表れていた。独身女性や未亡人が異常に多く存在するなど、全体的に女性人口が男性人口を凌駕していた［Smith 1970］。この地方における男女の性別構成の不均衡現象は、ポトシのミタに起因するものと判断される［Premo 2000:70-71］。

寒冷なティティカカ湖周辺地域にある共同体の場合、先住民の主な逃亡先のひとつが温暖なラパス・ユンガスであった。例えば、チュクィート地方のカシケがラパス・ユンガスに逃亡していた配下の先住民を元の村に連れ戻すため、当地に出張した記録がある。1604年にラパス・ユンガスの渓谷部の農園において250人以上の他地域出身の先住民が発見さ

[40] 無機水銀中毒とは、水銀との直接接触によって引き起こされる水銀中毒を指す。有機水銀中毒とは、メチル水銀を直接摂取するかもしくは、環境中のメチル水銀を、食物連鎖を介して摂取することによって引き起こされる水銀中毒である（水俣病の原因はメチル水銀で、無機水銀ではない）［原田 2002：32、49-51；原田 1985:191］。

[41] 水銀中毒や疾病、事故のほかにも、支配者によるミタヨ虐待などの事例は数え切れないほどたくさん存在していたことがロビンズによって指摘・報告されている［Robins 2011: 90-97］。

れたが、これがすべてチュクィート地方の7か村の出身であったという。こうした先住民の移動は、チュクィート地方にとどまらずパカヘス、オマスーヨス地方などアルティプラノの各地で見られた［Premo 2000:69］。

先住民移動の理由はさまざまであった。例えば、高地の共同体に所属するカシケがラパス・ユンガスにおいてコカ農園を所有・運営していたケースが頻繁にみられたが、その場合は、カシケが配下の先住民をユンガスに送り込んでいたと考えられる。ミタヨやその家族[42]にとって、元の村に帰る経済的余裕がなく、ポトシに残留したケースも多い。1596年にイエズス会修道士アントニオ・デ・アヤンス（jesuita Antonio de Ayans）は、チュクィート地方出身の6000人以上の人々がポトシに残留したと推定した[43]。いっぽうで、先住民がポトシから元の共同体に戻った場合、再びコレヒドール、司祭、カシケに搾取された。「ポトシから帰還したとしても、衣服はボロボロで今にも飢え死にしそうな状態であり、出くわす人々から物乞いをしている。かくも貧しくすべてを剥ぎ取られた」先住民は、「…捕虜でありギニアから運ばれた黒人以上に奴隷化されている」「道路沿いにあるタンボ（宿営）の維持にかり出される」とアヤンスは述べている［Premo 2000:70; Robins 2011:154-155］。

先住民の「逃亡」が共同体社会にもたらした影響について。共同体を離脱した一般の先住民の場合、とくにスペイン人の経営するアシエンダ（農園）に逃れた先住民はそれまでに支払っていた貢納やミタの義務から逃れることができた。新たな場所において彼らは外敵から保護された[44]けれども、しかし今度はアセンダード（地主）の強力な支配を受けるようになった。地主に対して負債を負う農園労働者（peón de débito）になった。アシエンダへの緊縛化が進み不自由な状況下におかれ、「永続的な隷属の重いくびき」を負わされた。こうした先住民の数は増加を遂げていき、ポトシにおけるミタ制の縮小に繋がった［Robins 2011:166］。

いっぽう、カシケの場合はどうか。配下の先住民がいなくなると、その者の貢納の肩代わりやミタ賠償金の支払いが彼らの双肩にのしかかってきた。彼らにとって状況は苦しくなってきた。最悪の場合は、カシケの座を手放さねばならなくなった。カシケのなり手がいなくなった結果、共同体が寂れてしまい、家畜・土地・家屋が見捨てられ荒れ地となった先住民村も出てきた。

一般の先住民に比べると優遇されていた[45]とはいえ、カシケもまた今まで以上にスペイン人支配者―コレヒドールや司祭から搾取・収奪された。またとくに17世紀末になる

[42] ポトシのミタに出かけた者は家族を同行することが多かった。
[43] ミタ終了後も多くの先住民が元の村に帰らずポトシに残留したケースについては、1615年に副王モンテスクラーロス侯（Juan de Mendoza y Luna, Marqués de Montesclaros. 在位1607-1615）によっても指摘されている［Robins 2011:155］。
[44] 農園主は到来者の貢納を支払い、ミタ、レパルティミントから彼らを保護した。
[45] カシケ自身は貢納やミタを免除されていた。

とレパルティミエント（repartimientos de mercancías. 先住民への商品の強制販売[46]）制が新たに登場し、カシケはコレヒドールからこの負担を課せられるようになる［Robins 2011:155-156,166,168］。レパルティミエントは18世紀ペルーにおける大反乱（1780-83年のトゥパック・アマルの反乱に代表される）の最大級の原因となった制度である［Golte 1980; Flores Galindo 1987:115］[47]。

３．銀鉱業への影響

17世紀半ば以降、1570年代に副王トレドが打ち立てたシステムは危機に瀕し、ポトシの銀生産は下落していく。ポトシの銀生産量に関して、アンドリーエンやマンガンによる詳細な調査がある。アンドリーエンは、「1600年には712万9719ペソの生産量を誇ったが、1650年には442万8594ペソに、また1700年には197万9128ペソに下落した」と考察した［Andrien 1985:14］。マンガンの調査は10年単位で銀生産の動向を示しており、17世紀後半以降銀の生産は急激に下がり続けたとある。1651-60年には3856万1481ペソであったが、1701-10年には1546万828ペソに下落したと述べている［Mangan 2005:195］。ポトシの人口も減少をたどる。17世紀当初には16万人のピークにあった人口は、1660年には14万5000人に、1680年には11万人に、1700年には7万3000人にまで減少した、とマンガンは指摘している［Mangan 2005 :17,165; 真鍋 2017:79］[48]。ポトシの最盛期、ポトシに徴集されたミタ労働者の人数は年間13500人であった。しかしその後減少していった。例えば、チュクィート地方の場合、1617年には1854人がポトシに送られるはずであったが、実際に提供された人数は1194人であった（660人が不足していた）。1692年には535人にまで低下した［Sempat Assadourian 1992（segunda edición）:89; Tandeter 1992:48］。

ワンカベリカ水銀鉱山における水銀生産量とミタヨの徴集数もまた下落していった。例えば、その年間生産量は1582年には13611キンタル（quintal. 重量の単位。1キンタルは46kg）のピークを遂げたが、1689年にはわずか2015キンタルの生産にまで下落した［Andrien 1985:13-15］。またワンカベリカ水銀鉱山のミタの徴集規模も低下の一途をたどった。トレドの命令で集められたワンカベリカ鉱山のミタヨは最盛期には年間に3289人であった。1586年時点でみると、その徴集人数は減少し2274人となった。さらにミタの徴

---

[46] レパルティミエント制とは、コレヒドールがその管轄区（＝地方）の先住民に物品を強制的に割り当て、その代価を強制徴収する方式である。スペイン法に照らして当時それは「不法」行為であった。1754年スペイン王権により法制化された［真鍋 1995:153-159,246］。

[47] ペルー植民地経済は二つの限界に遭遇した。第一は労働力調達上の限界（la disponibilidad de mano de obra）、第二は市場能力の限界（la limitación del mercado interna）である。これを一気に打破したのが、ペルー副王領の諸地方において最大級の権力を発揮したコレヒドールによるレパルティミエント制であったとゴルテは指摘した。レパルティミエントは17世紀に出現し、18世紀にこの二つの限界を打破するべく覇権主義的に発展させられたとした［Golte 1980:14-15］。

[48] ポトシの人口は1776年には3万2000人にまで減少する［Robins 2011:169］。

集人数は 1604 年には 1600 人、1630 年は 1400 人、1645 年には 620 人、1680 年には 400 人以下に、1684 年には 286 人、1685 年にはわずか 44 人にまで低下した［Robins 2017:82-83; Robins 2011:179］。

V　おわりに

ポトシ銀山の繁栄は水銀アマルガム法による銀の精錬と王権によって再編されたミタを基盤としていた。17 世紀アンデスの先住民社会はポトシ銀山の繁栄・停滞・凋落と平行して変容を遂げていく。カシケがキーポイントを占めた。アルティプラノのティティカカ湖周辺の先住民共同体においてその社会変化は著しかった。カシケがポトシ市場の需要に応えるべく、太平洋沿岸部やラパス・ユンガスにおける商品・換金作物であるぶどう酒やコカの取引にもっぱら従事したことは注目に値する。市場経済が浸透していく中で一部のカシケはまさに富裕者となった。

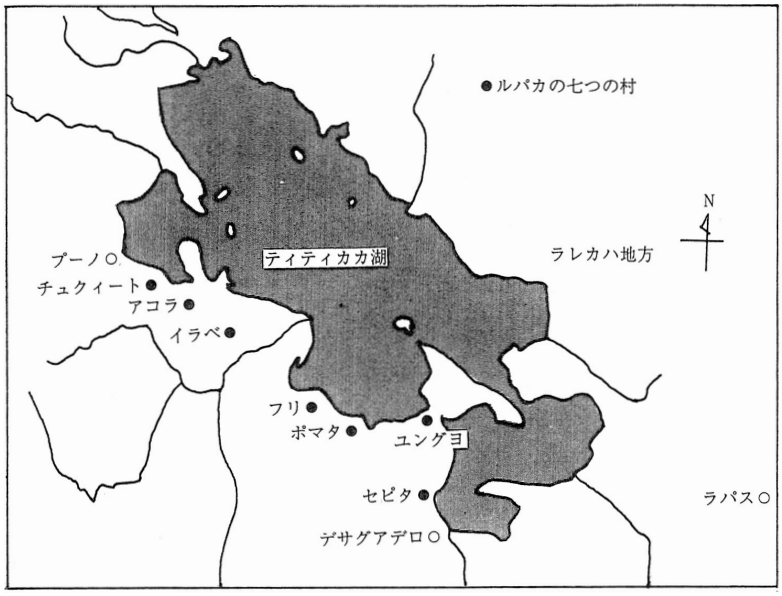
ぶどう酒生産は太平洋沿岸部のアレキパやモケグアの渓谷部に集中していた。コカの栽培はラパス・ユンガスにおいて先スペイン期から行われていたが、それをスペイン人征服者が継承した（アシエンダの形成）。その労働力の多くはアルティプラノから供給された。先住民としてはポトシ銀山のミタを免れたい一心でユンガスに身を投じた。先住民成年男子が共同体を離脱してよそ者となる現象は副王トレドの時代以前からみられたけれども、しかし副王トレドの諸政策以降、この現象に拍車がかかった。ポトシのミタ労働者の生存環境が著しく悪化したためである。ロビンズの研究が示しているように、17 世紀においてポトシの精錬部門を中心に水銀中毒症が蔓延した。ミタの回避が顕在化した。主たる逃亡先はラパス･ユンガスであった。しかし、共同体を離脱した先住民は、今度はアセンダードから強力な支配を受けるようになり、アシエンダに緊縛され不自由な状況下におかれる。他方、17 世紀末になると共同体にとどまったカシケをはじめ先住民はレパルティミエント制などの抑圧に晒されるようになった。

16 世紀以降ポトシの銀鉱業は植民地ペルーの経済を牽引してきた。だが 17 世紀末の時点でペルー副王領内を俯瞰すると、ポトシ銀鉱業の衰退と反比例するかの如く経済の多様化がみられる。例えば、ポトシ以外にも多数の銀鉱山が出現していた。キト地域では織物業が伸長していた。リマ、アレキパなど沿岸部諸都市を拠点とする農牧畜業・商工業、そして内陸部でも農牧畜業・商工業の進展がみられた。同時に商業・輸送業も著しく進展していた。

付記

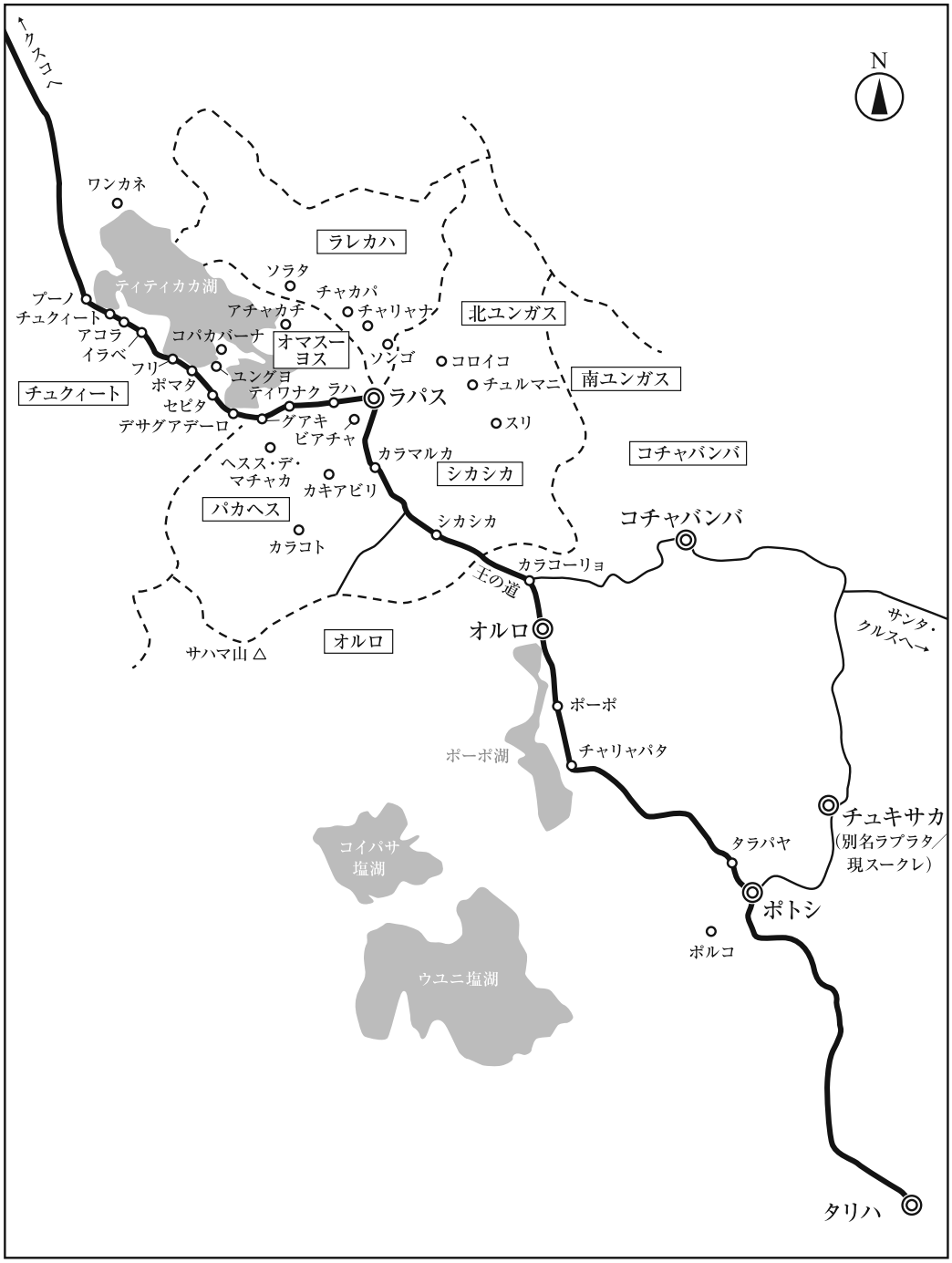
本稿では、ラパス・ユンガスにおけるコカ栽培の実態やアシエンダの分布等にまで言及できなかった。イタリア・ボローニャ大学人文・哲学部のラウラ・ラウレンチック・ミネリ先生（Prof. Laura Laurencich Minelli）のご厚意で収集できたラパス・ユンガス関係の資料も未消化のままとなった。次回を期したいと思います。

地図１　植民地時代チュクィート地方



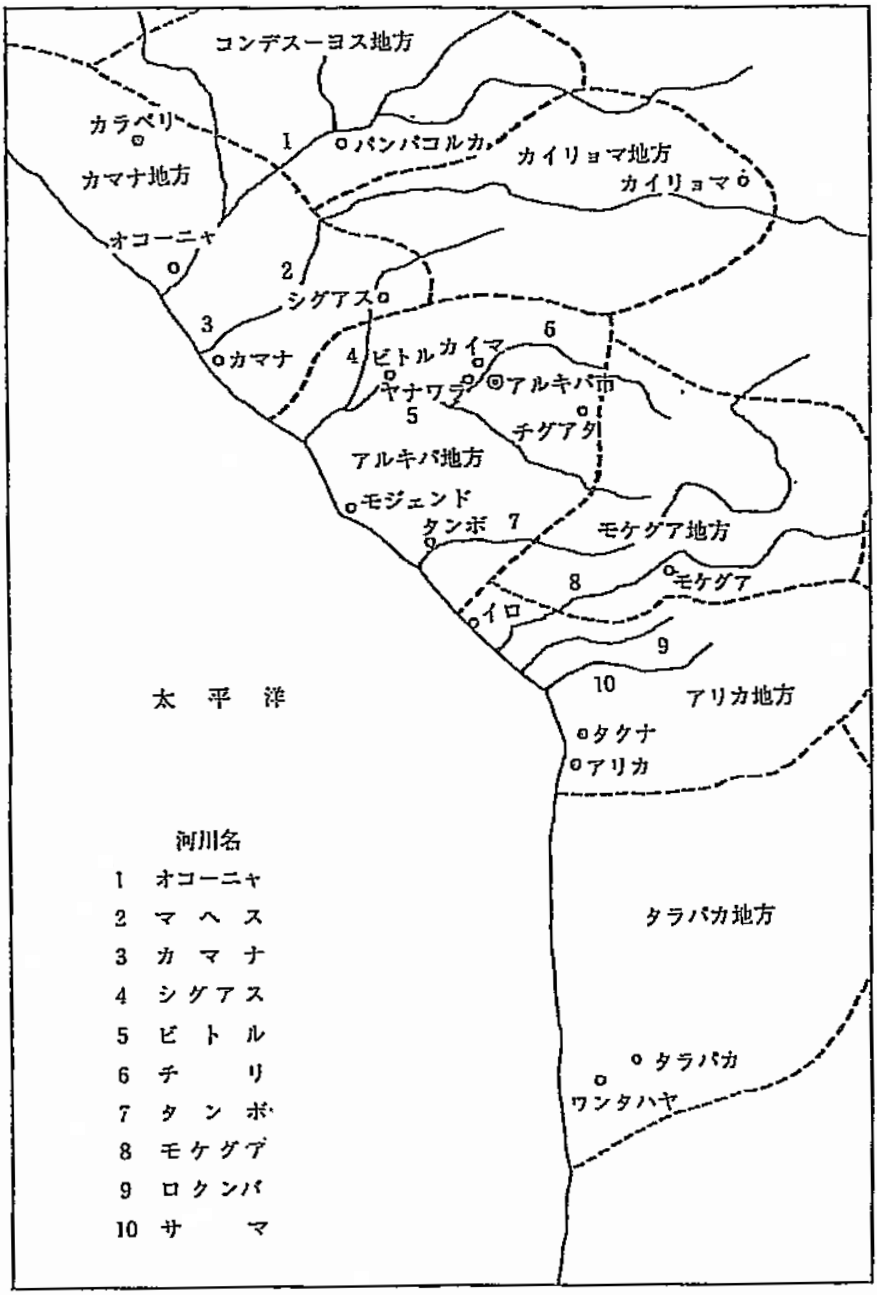
出所：［真鍋 1995:21］

地図２　植民地時代アルトペルーの概要



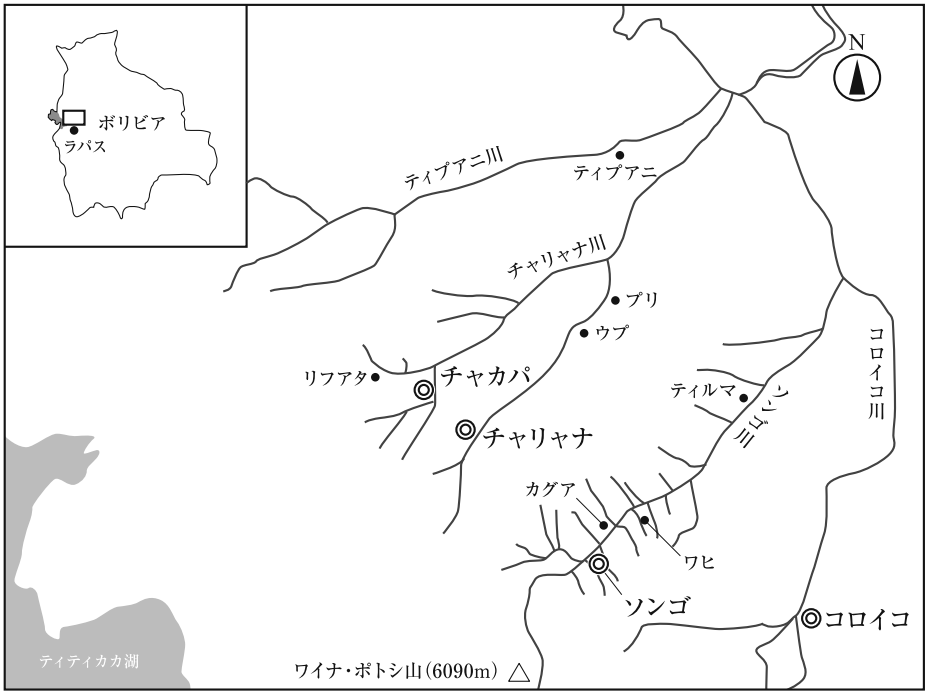
出所：［Freddy Ortiz V. , Rafael Ortiz R.,“Bolivia, principales caminos y parques nacionales.”; Klein1980:193］（作図：へんな優）

地図３　植民地時代ペルー南部沿岸地域



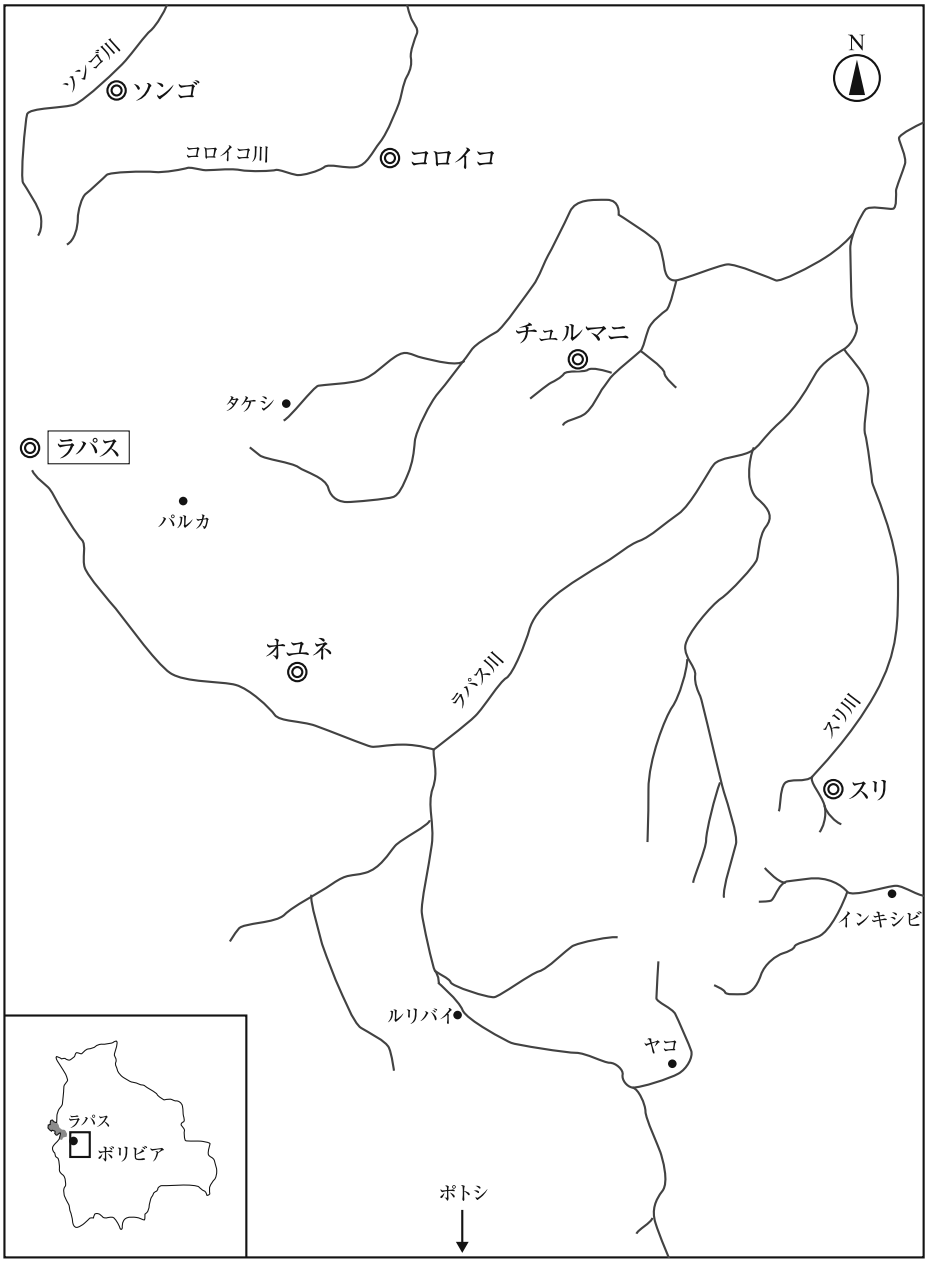
出所：［Brown 1986:9;　真鍋　1995;103］

地図４　16世紀ラパス・ユンガス地域（北ユンガス）
(1)チャカパ、チャリャナ、ソンゴ、コロイコの位置



出所：［Angelis-Harmening 2000:21］（作図：へんな優）

地図５　16世紀ラパス・ユンガス地域（南ユンガス）
⑵ソンゴ、コロイコ、チュルマニ、スリ、オユネの位置



出所：［Angelis-Harmening 2000:29］（作図：へんな優）

地図６　1609-1690年、リマ財務府の地理的管区－19の地方拠点－

出所：［Andrien 1985: 92］（作図－へんな優）

第１表　アルティプラノのカシケの経済活動の一覧

地方名	カシケ	事業家としての経済的行動
チュクィート	ディエゴ・チャンビーリャ（Diego Chambilla）	1618年から1626年頃にかけてポマタ村のアナンサヤのカシケに就任しており、ポトシ銀山のミタの差配を務めた。1618年には年間に１万5000ペソの取引を行った。ポトシとオルロにおいて食料雑貨店を営みぶどう酒、アヒ、チューニョ、織物、乾燥魚などの商品を販売していた（これだけで4000ペソを超えた）。またリャマの飼育用として15から20くらいのエスタンシア（牧畜用地）を所有しており、家畜を飼育していた。また太平洋沿岸部モケグア地方のロクンバ谷に農地を所有。サマの渓谷（モケグア地方）ではブドウ（やアヒ）の獲れる土地を所有し、ぶどう酒を造り販売した。アヒの送付に関しては、1620年にはアヒ120かごを、1624年にはアヒ288かごを市場に送ったとの記録がある。アリカ地方の渓谷部にも土地を所有。ぶどう酒（や農作物）をポトシ市場に運び販売した
パカヘス	ガブリエル・フェルナンデス・グアラチ（Gabriel Fernández Guarachi）ならびにその一族	父親の死を機にカシケに就任。ヘスス・デ・マチャカ村の主要カシケで統治者（cacique principal y gobernador del pueblo de Jesús de Machaca de la Provincia de Pacajes）となった（1630年から1673年頃までカシケを務めた）。ポトシ銀山のミタの差配を務めた。ポトシ市において手広く商業を展開した。ぶどう酒の輸送業に従事。大平洋沿岸のモケグア谷に大ブドウ園（viñedo）を所有し、1000頭以上のリャマ、80頭のラバ（mulas）（駄獣）を使ってモケグアからぶどう酒をアルトペルーの各地に輸送し商った（1673年には3600頭のリャマ、160頭のラバ、5000頭の雄羊、1000頭の牛を所有したほかトウモロコシや小麦、堆肥を提供。一度の取引で6000ペソを超えることもあったという）。ポトシ市ではぶどう酒を貯蔵するために酒倉（ワインセラー）を所有。モケグア谷ではトウモロコシや小麦も育てていた。近隣（パカヘス、シカシカ、ラレカハ諸地方）の渓谷部では11以上のチャクラ（chacra o chacara. 農地）とエスタンシア（牧畜用地）を所有し運営していた。サン・ペドロ（San Pedro）ではアシエンダ（大農場）を維持。スペイン人との商取引に従事した。

地方名	カシケ	事業家としての経済的行動
		ガブリエルの死後、寡婦のフアナ・キスペ・シサ（Juana Quispe Sisa）はぶどう酒の商売を続行した。1684年に彼女はアントニオ・メヒア（Antonio Mexía）（ラパス市の住人）に、アレキパ産の良質のぶどう酒を提供。１ボティハ当たり6ペソの値でぶどう酒1000ボティハを扱う（6000ペソの額）。その後を継いだ息子のホセフ（Joseph Fernández Guarachi）もまた同村の主要カシケにして統治者（1681-1734年）に就任したほか、ティティカカ湖で漁業に従事したと言われている。 ガブリエルの甥のペドロ・フェルナンデス・グアラチ（Pedro Fernández Guarachi）もまたヘスス・デ・マチャカ村のカシケにして統治者となり、ポトシ銀山のミタの差配を務める。ポトシ市ではぶどう酒やコカの商売に従事した。ペドロは旅行中に死亡したのだったが、それはモケグア、ロクンバ、アレキパの渓谷部からぶどう酒を搬送中のことであったという。またラパス・ユンガスのチュルマニ村（チャペ：Chape）においてコカのアシエンダを1600ペソで購入していた。
	ディエゴ・シルパ（Diego Sirpa）	ビアチャ（Viacha）村のカシケであり、ポトシ市でぶどう酒とチューニョ（chuño. ジャガイモを凍結乾燥処理した食料）を販売した有力商人であった（ガブリエル・フェルナンデス・グアラチのライバルでもあった）。ラパス市から７レグア（legua. レグアは長さの単位。１レグアは約5.6km）の場所にあるモリェカバ（Mollecava）のエスタンシアに住んでいた。５つのエスタンシアを所有した。コンポシシオン（Composición de Tierras）で手に入れたものである[50]。ディエゴ・シルパは1655年に亡くなったが、遺言執行人によると、シルパは代理業者バルトロメ・ペレス（Bartolomé Pérez）にアレキパのぶどう酒2000ボティハの処理を委託していたこと、それはポトシ市場に輸送されたこと、その分量のぶどう酒は、当時ポトシに供給されていた分量の中では最大級のものであったことが判明する。商品輸送においては3500頭ものリャマを使用。ほかに60頭のロバ、20頭のラバ、300頭の牛、80頭のアルパカ、１万2000頭の雄羊（食肉用、採毛用）を所有。1656年には300かごのコカを商った。ラパスとポトシの自宅には350荷のチューニョのほかモケグアとアレキパ産のぶどう酒900ボティパを所持。都市部と田舎に有する不動産を考慮せずともその商品のみで莫大な資産になった。

[50] コンポシシオンとは、1591 年から始まった王権による土地政策。未利用地あるいは所有者なしと判断し押収した先住民の土地を公売に処す政策。17 世紀、とくに 1630-40 年代にさかんに実施された。[真鍋 1995: 87-88; López Beltrán 1998: 209 参照]。

地方名	カシケ	事業家としての経済的行動
	フアン・チョケ・グアマン（Juan Choque Guamán）	カキアビリ村（pueblo de Caquiaviri）のカシケにして統治者であった（1670年まで）。ぶどう酒の商売に従事しており、モケグア産の275ボティハのぶどう酒のほか、1187頭の雄羊と18頭のラバを所有していた。輸送業にも手を染めていた。
シカシカ	ディエゴ・チパナ（Diego Chipana）	カラマルカ村（Calamarca de la provincia de Sicasica）の主要カシケであった（1670年から1680年にかけて在職）。ぶどう酒の取引きに従事した。カラマルカ村とビアチャ村（パカヘス地方）、ラパス市郊外に有した農地でチューニョをつくって販売。ラパス・ユンガスのコロイコにおいてコカのアシエンダ（una hacienda coquera）を所有。50袋ほどのコカを収穫し販売した。カラコト（Caracoto）の谷で果樹園（huelta）を営んでいたほか、トウモロコシや小麦を栽培しポトシで販売した。100頭の牛、1600頭の羊、200頭のリャマ、50頭のラバを所持。4200ペソの貸付け金を有す。モケグア谷に代理人を擁し、ぶどう酒750ボティハを入手する。
	ペドロ・チパナ	1675年、カラマルカ村のカシケに就任。妻はアナ・ピチュ。息子はセバスティアン。

出所：［Choque Canqui 1987:357-375; López Beltrán 1998:213-215］

（ガブリエル・フェルナンデス・グアラチが所有していた家畜、（シカシカ、ラレカハ両地方に所有していた）土地、債権（貸し付け）の詳細、カラマルカのカシケにして商人のペドロ・チパナをめぐる状況は、［Rivera Cusicanqui 1978:10-12,14-16; Choque Canqui 1978:28-32］参照。

第２表　1587-1649年、コカ、リャマ、ぶどう酒の単価

（単位：ペソ）

年代	コカ（かご）	リャマ（頭）	ペルー産のぶどう酒（ボティハ）
1587	11.43	10.52	12.73
1589	10.86	8.65	15.10
1594	—	8.10	12.37
1599	—	—	12.00
1604	9.64	6.05	—
1609	7.00	8.84	16.78
1614	8.12	6.95	—

年代	コカ（かご）	リャマ（頭）	ペルー産のぶどう酒（ボティハ）
1620–21	6.84	5.71	12.36
1625	7.16	7.49	14.07
1630	6.21	5.08	11.91
1635–36	4.77	4.59	13.00
1640	—	4.85	—
1645	—	4.51	—
1649	5.51	4.06	15.00

出所：［Bakewell 1984:194］

第３表　1572-1635年、伝染病の発生

年代	場所	病気の種類
1572–73	ペルー	天然痘、はしか（麻疹）
1584	ペルー（とくにポトシ）	不明の疫病
1585	ペルー、キト、サンタフェ	天然痘、はしか
1589	ポトシ	インフルエンザ
1590–93	ポトシ、チャルカス全域	天然痘、はしか
1615	ペルー	不明の伝染病
1618-19	キト、リマ、中央シエラ、ポトシ	はしか
1628	ペルー	はしか
1634–35	ペルー	はしか

天然痘、はしか、インフルエンザなどの伝染病は、寒冷でかつ乾燥した気候の下で流行した。16 世紀ペルーではチフスやペストも到来した。病気は人々の密集するレドゥクシオン（先住民集住区）では急速に広がった。

出所：［Bakewell 1984:109; Robins 2017:36-38］

参考文献

網野徹哉
2017 『インディオ社会史』、みすず書房。

Andrien, Kenneth J.
1985 *Crisis and Decline The Viceroyalty of Peru in the Seventeenth Century*, University of New Mexico Press, Albuquerque.

Angelis-Harmening, Kristina
2000 *…cada uno tiene en la puna su gente." Intercambio y verticalidad en el siglo XVI en los yungas de La Paz*. BAS 34, Anton Saurwein, Verlag.

Arzáns de Orsúa y Vela, Bartolomé
1965 *Historia de la Villa Imperial de Potosí*, edited by Lewis Hanke and Gunnar Mendoza, 3 vols（Tomo I, Tomo II, Tomo III）, Brown University Press, Providence, R.I.

Bakewell, Peter
1984 *Miners of the Red Mountain Indian Labor in Potosí, 1545-1650*, University of New Mexico Press, Albuquerque.

Brown, Kendall W.
1986 *Bourbons and Brandy Imperial Reform in Eighteenth- Century Arequipa*, University of New Mexico Press, Albuquerque.

Capoche, Luis
1959 *Relación general de la Villa Imperial de Potosí*, edición y estudio preliminar por Lewis Hanke, Ediciones Atlas-Biblioteca de Autores Españoles, Madrid.

Choque Canqui, Roberto
1978 "Pedro Chipana: cacique comerciante de Calamarca." *Avances*, Revista Boliviana de Estudios Históricos y Social, 1, febrero, La Paz, pp.28-32.
1987 "Los caciques aymaras y el comercio en el Alto Perú." en *La participación indígena en los mercados surandinos estrategias y reproducción social siglo XVI a XX*, por compiladores de Olivia Harris, Brooke Larson, Enrique Tandeter, Centro de Estudios de la Realidad Económica y Social, La Paz, pp.357-377.

Diez de San Miguel, Garci
1964 *Visita hecha a la provincia de Chucuito en el año 1567*, ed. Waldemar Espinoza Soliano, Casa de la Cultura del Perú, Lima.

Dollfus, Olivier
1996 “Los Andes como memoria.” en *Comprender la agricultura campesina en los Andes Centrales, Perú y Bolivia*, por Pierre Morlon, compilador y coordinador, Instituto Francés de Estudios Andinos, Centro de Estudios Regionales Andinos “Bartolomé de Las Casas”, Lima, pp.11-29.

Escobari de Querejazu, Laura
1985 *Producción y comercio en el espacio sur andino en el siglo XVII Cuzco-Potosí 1650-1700*, La Paz.
2001 *Caciques, yanaconas y extravagantes, la sociedad colonial en Charcas s. XVI-XVIII*, Embajada de España en Bolivia, y plural, La Paz.

Flores Galindo, Alberto
1987 *Buscando un inca: identidad y utopía en los Andes*, Instituto de Apoyo Agrario, Lima.

Garavaglia, Juan Carlos
2000 “Plata para el Rey. Tecnología y producción en el Potosí colonial.” en *Potosí plata para Europa*, por compilador de Juan Marchena Fernández, Universidad de Sevilla, Fundación El Monte, Sevilla, pp.125-140.

Glave, Luis Miguel
2000 “Trajines, abastecimiento y mercado: Potosí, siglos XVI-XVII.” en *Potosí plata para Europa*, por compilador de Juan Marchena Fernández, Universidad de Sevilla, Fundación El Monte, Sevilla, pp.155174.

Golte, Jürgen
1980 *Repartos y rebeliones: Túpac Amaru y las contradicciones de la economía colonial*, Instituto de Estudios Peruanos, Lima.

原田正純
1985『水俣病は終わっていない』、岩波書店。
2002『金と水銀―私の水俣学ノート』、講談社。

Jiménez de la Espada, Marcos
1885 “Descripción de la Villa Imperial de Potosí, año de 1603.” en *Relaciones geográficas de Indias*, vol. II, Ediciones Atlas, Madrid, pp.372-385.

Klein, Herbert S.
1980 “The Structure of the Hacendado Class in Late Eighteenth-Century Alto Peru: The Intendencia de La Paz.” *Hispanic American Historical Review*, 60（2）, pp.191-212.
1987 “Producción de coca en los Yungas durante la colonia y primeros años de la República.” *Historia y Cultura*, 11, pp.3-16.

1995 *Haciendas y ayllus en Bolivia, siglos XVIII-XIX*, Instituto de Estudios Peruanos, Lima.

López Beltrán, Clara
1998 *Alianzas familiares elite, género, y negocios en La Paz, siglo XVII*, Instituto de Estudios Peruanos, Lima.

真鍋周三
1995『トゥパック・アマルの反乱に関する研究―その社会経済史的背景の考察―』神戸商科大学研究叢書 LI、神戸商科大学経済研究所。
2006「植民地時代ペルーにおけるワンカベリカ水銀鉱山と水銀汚染問題―植民地時代前半期」『京都ラテンアメリカ研究所紀要』No.6、京都外国語大学、19-55 頁。
2011「植民地時代前半期のポトシ銀山をめぐる社会経済史研究―ポトシ市場経済圏の形成―（前編）」『京都ラテンアメリカ研究所紀要』No.11，京都外国語大学、57-84 頁。
2012「植民地時代前半期のポトシ銀山をめぐる社会経済史研究―ポトシ市場経済圏の形成―（後編）」『京都ラテンアメリカ研究所紀要』No.12、京都外国語大学、1 － 31 頁。
2013「植民地時代後期ペルー・モケグア地域産アグアルディエンテの流通をめぐって―ブルボン改革との関係で―」『人文論集』第 47 巻、兵庫県立大学、35-54 頁。
2017「17 世紀ポトシにおけるビクーニャスとバスコンガドスの戦い（1622 ～ 1625 年）の社会経済的背景―バスク人の動向を中心に―」『人文論集』第 52 巻、兵庫県立大学、63-85 頁。
2019「植民地時代後半期ペルー・ワンカベリカ水銀鉱山の動向をめぐって―ブルボン改革との関係で―」『人文論集』第 54 巻，兵庫県立大学、11-34 頁。
2020「植民地時代前半期ポトシにおける銀貨の鋳造とその流通」『人文論集』第 55 巻、兵庫県立大学、73-95 頁。

Málaga Medina, Alejandro
1987 “La región sur del Perú en el período colonial. ” en *Coloquio estado y región en los Andes*, por Centro de Estudios Rurales Andinos “Bartolomé de Las Casas”, Cusco, pp.155-158.

Mangan, Jane E.
2005 *Trading Roles: Gender, Ethnicity, and the Urban Economy in Colonial Potosi*, Duke University Press, Durham and London.

Meiklejohn, Norman
1988 *La iglesia y los lupaqas de Chucuito durante la colonia*, Centro de Estudios Rurales Andinos “Bartolomé de Las Casas” Instituto de Estudios Aymaras, Cusco.

Morlon, Pierre（compilador y coordinador）
1996 *Comprender la agricultura campesina en los Andes Centrales, Perú –Bolivia*, Instituto Francés de Estudios Andinos, Centro de Estudios Regionales Andinos “Bartolomé de Las Casas”, Lima.

Murra, John V.
1996 “El control vertical de un máximo de pisos ecológicos y el modelo en archipiélago.” en *Comprender la agricultura campesina en los Andes Centrales, Perú y Bolivia*, por Pierre Morlon, compilador y coordinador, Instituto Francés de Estudios Andinos, Centro de Estudios Regionales Andinos “Bartolomé de Las Casas”, Lima, pp.122-130.
2002 “La correspondencia entre un “capitán de la mita” y su apoderado en Potosí.” en *El hombre y los Andes homenaje a Franklin Pease G.Y.*（Tomo II）, por editores de Javier Flores Espinoza y Rafael Varón Gabai, Pontificia Universidad Católica del Perú, Fondo Editorial, Lima, pp.785-794.

O’Pelan Godoy, Scarlett
1985 *Rebellion and Revolts in Eighteenth Century Peru and Upper Peru*, Böhlau Verlag Köln Wien.

Parkerson, Phillip T.
1984 “El monopolio incaico de la coca ¿realidad o ficción legal?” *Historia y Cultura*, 5, La Paz, pp.1-27.

Premo, Bianca
2000 “From the Pocket of Momen: The Gendering of the Mita, Migration and Tribute in Colonial Chucuito, Peru.” *The Americas*（A Quarterly Review of Inter-American Cultural History）, Vol.57, Number 1, pp.63-94.

Rivera Cusicanqui, Silvia
1978 “El mallku y la sociedad colonial en el siglo XVIII: el caso de Jesús de Machaca.” *Avances*, Revista Boliviana de Estudios Históricos y Social, 1, febrero, La Paz, pp.7-27.

Robins, Nicolas A.
2011 *Mercury, Mining, and Empire the Human and Ecological Cost of Colonial Silver Mining in the Andes*, Indiana University Press, Bloomington and Indianapolis.
2017 *Santa Barbara’s Legacy: An Environmental History of Huancavelica, Peru*, Blill, Leiden/Boston.

ロストウォロフスキ、マリア
2003『インカ国家の形成と崩壊』増田義郎訳、東洋書林。

Rowe, John H.
1998 “Cómo Francisco Pizarro se apoderó del Perú.” en *Actas del IV Congreso Internacional Etnohistoria, Tomo II*, Pontificia Universidad Católica del Perú, Fondo Editorial, Lima, pp.517-534.

Saignes, Thierry
1985 *Caciques, Tributo and Migration in the Southern Andes: Indian Society and the 17th Century Colonial Order*（*Audiencia de Charcas*）, Translated by Paul Garner with revisions by Tristan Platt, University of London, Institute of Latin American Studies, London.
1987 "Ayllus, Mercado y coacción colonial: el reto de las migraciones interna en Charcas（siglo XVII）." en *La participación indígena en los mercados surandinos estrategias y reproducción social siglo XVI a XX*, por compiladores de Olivia Harris, Brooke Larson, y Enrique Tandeter, Centro de Estudios de la Realidad Económica y Social, La Paz, pp.111-158.

Salles, Estela Cristina
2001 "Cuestiones sobre Chucuito en el siglo XVI: las exacciones de la iglesia." en *América bajo los Austrias: economía, cultura y sociedad*. por editor de Hector Noejovich Ch., Pontificia Universidad Catórica del Perú, Fondo Editorial, Lima, pp.133-140.

Sánchez-Albornoz, Nicolás
1978 *Indios y tributarios en el Alto Perú*, Instituto de Estudios Peruanos, Lima.

Sempat Assadourian, Carlos
1982 *El sistema de la economía colonial: el mercado interior, regiones y espacio económico*, Instituto de Estudios Peruanos, Lima.
1992 "La crisis demográfica del siglo XVI y la transición del Tawantinsuyu al sistema mercantil colonial." en *Población y mano de obra en América Latina*, compilación de Nicolás Sánchez-Albornoz, Alianza Editorial, S. A., Madrid, pp.69-93.

Smith, Clifford Thorpe
1970 "Depopulation of the Central Andes in the 16th Century." *Current Anthropology*, XI, No.4-5, Lima, pp.453-464.

Spalding, Karen
1974 *De indio a campesino*, Instituto de Estudios Peruanos, Lima.

Tandeter, Enrique
1992 *Coacción y mercado: la minería de la plata en Potosí colonial, 1692-1826*, Editorial Sudamericana, Buenos Aires.

Troll, Carl,
1980 "Las culturas superiores andinas y el medio geográfico." *Allpanchis*, Vol. XIV, No.15, Cusco, pp.3-55.

ワシュテル、ナタン
1984 『敗者の想像力―インディオのみた新世界征服―』小池佑二訳、岩波書店。